令和２年度　卒業論文

amazarashi 秋田ひろむの歌詞における表現特性

大阪教育大学　教育学部

学校教育教員養成課程　小中教育専攻　国語教育コース

国語表現ゼミナール

１７２３１６　坂浦 みなみ

指導教員　野浪 正隆　先生

令和３年１月２９日提出

（原稿用紙換算　１８８枚）

目次

序章　研究動機・目的　1

第一章　研究概要

第一節　研究対象

第一項　アーティスト　秋田ひろむ　1

第二項　対象楽曲　2

第二節　研究方法

第一項　語彙分析　5

第二項　構成分析　5

第三節　分析のねらいと予想される結論　6

第二章　分析結果

第一節　語彙分析　7

第二節　構成分析　9

第三章　考察　２０

第四章　まとめと今後の課題　４５

終章　終わりに　４６

参考文献・使用ソフトウェア　４７

序章　研究動機・目的

今、どんな歌が聴きたいか。その日・その時の心理状態によって、聴きたい歌は変化する。私にとって、ひどく心が疲れているとき、気が滅入っているとき、深い絶望を味わったときに頭に浮かび、聴きたくなるのが、Vo.Gt.秋田ひろむと Key.Cho.豊川真奈美から成る二人組ロックバンド「amazarashi」の楽曲である。傷ついた心が彼らの楽曲を強く求めるのはなぜなのか。そしてその楽曲が、絶望の闇に沈む者に一筋の光を与えるのはなぜなのか。それらを、歌詞における表現特性に基づいて解き明かしたいと思い、本研究を進めることを決めた。

当バンドのボーカルであり作詞作曲を担当する秋田ひろむは、「日常、降りかかる悲しみや苦しみを雨に例えて、僕らは雨曝しだが“それでも”というところを歌えたら」という思いを込めて、自身のバンドを「amazarashi」と名付けた。[i]実際、彼の書く歌詞は悲しみや苦しみ、怒り、憎悪などを大いに孕んでおり、到底「明るくポジティブ」なものとは言えない。人生や社会における負の側面を鮮明に描き出しながら、それでもなお光に満ちた力強さをもつ。その力強さを演出する表現特性を捉え、秋田ひろむの書く歌詞のパターンを明らかにすることを、本研究の目的とする。

第一章　研究概要

第一節　研究対象

第一項　アーティスト 秋田ひろむ

青森県上北群横浜町出身。音楽を始めたきっかけは、小学校 6 年生の時に姉が聴いていた TM NETWORK に憧れてキーボードを購入したことだという。2007 年 1 月、豊川と共にバンド「STAR ISSUE」を結成する。同年 5 月に青森県で行われたアマチュアバンドのライブイベント『グルコン Vol.17 青森 ～Joker Style Summit～』でローランド賞を受賞し、それ以降バンド名を「あまざらし」に変更。2009 年 2 月、ミニアルバム『光、再考』を青森県内の CD ショップ限定で発売しインディーズデビューを果たす。[ii]

2010 年 2 月にはバンド名の表記を「amazarashi」に変更し、2009 年 12 月に青森県内の CD ショップのみで 500 枚限定で発売したミニアルバム『0.』にボーナストラック 1 曲を追加収録した全国流通盤『0.6』をリリース。同年 4 月にはソニー・ミュージックアソシエイテッドレコーズへの移籍を発表し、6 月にはミニアルバム『爆弾の作り方』を発売してメジャーデビューを果たす。[iii]

インディーズデビュー当初から続く、顔出しをせずに活動するスタイルや CD への詩集の封入、ライブにおけるステージ前のスクリーンに歌詞映像を映し出す演出などは、詞の世界に注目してもらいたいという秋田の意向によるものである。秋田は、歌詞、すなわち言葉のもつ力を極めて重視している人物だといえる。そのような言葉に対する思い入れは、彼が書く歌詞の端々から見て取れる。以下、amazarashi の楽曲「独白」の歌詞を引用する。

音楽や小説　映画とか漫画　テレビ　ラジオ　インターネット
母が赤ん坊に語る言葉　友人との会話　傷つけられた言葉　嬉しくて嬉しくてたまらなかった言葉
喜び　悲しみ　怒りだとか憎しみ　かつての絶望が残す死ぬまで消えない染み
それが綺麗な思い出まで浸食して汚すから　思い出も言葉も消えてしまえばいいと思った
言葉は積み重なる　人間を形作る　私が私自身を説き伏せてきたように
一行では無理でも十万行ならどうか　一日では無理でも十年を経たならどうか
奪われた言葉が　やむにやまれぬ言葉が　私自身が手を下し息絶えた言葉が
この先の行く末を決定づけるとするなら　その言葉を　再び私たちの手の中に
奪われた言葉が　やむにやまれぬ言葉が　私自身が手を下し息絶えた言葉が
この先の行く末を決定づけるとするなら　その言葉を　再び私たちの手の中に
再び私たちの手の中に　今再び　私たちの手の中に
言葉を取り戻せ

彼は、言葉を「**人間を形作る**」ものと捉えているのだ。「**私が私自身を説き伏せてきた**」とは、偽りの言葉を積み重ねて自分自身を誤魔化すことで自ら偽りの自分を形作ってきたということであり、「**私自身が手を下し息絶えた言葉**」とは、その過程で見ないふりをしてきた、飲み込んできた本当の言葉たちのことである。全体の調和のために、悪目立ちしないために、笑われないために、傷つかないために、自分で自分を誤魔化し、自分自身の言葉を殺す。そのような経験に心当たりのある者は少なくないだろう。秋田もその一人だったのだ。そして彼は、「**その言葉を再び私たちの手の中に**」と続ける。繰り返されるそのフレーズには、一度は飲み込んだ、諦めた、見ないふりをしてしまった言葉たちを自分の手で取り戻さなければならないという強い意志が表れている。「**一行では無理でも十万行ならどうか**」、「**一日では無理でも十年を経たならどうか**」。実際に秋田は２００７年のバンド結成からこの「独白」を発表する２０１８年まで１０年以上、自身の言葉を音楽にのせて叫び続けてきた。どれだけ傷ついても、迷っても、絶望しても、言葉と向き合い続けてきたのである。そんな秋田が紡ぐ言葉が、どのような表現を通してリスナーに伝わっているのかを解き明かしていきたい。

第二項　対象楽曲

amazarashi の楽曲１２７曲（先述したミニアルバム『光、再考』から、2020 年３月 11 日にリリースされ自身最高位のオリコン週間２位を記録した５枚目のフルアルバム『ボイコット』まで）。以下にミニアルバム・フルアルバム・シングルごとの楽曲リストを掲載する。なお、『光、再考』に収録されている楽曲は全て『０.』以降のミニアルバム又はフルアルバムに再録されているため、以下の表においては『光、再考』を省略する。

０．／０．６	１．光、再考	夕日信仰ヒガシズム	６２・ヒガシズム
	２．つじつま合わせに生まれた僕等		６３．スターライト
	３．ムカデ		６４．もう一度
	４．よだかの星		６５．夜の一部始終
	５．少年少女		６６．穴を掘っている
	６．初雪		６７．雨男
爆弾の作り方	７．夏を待っていました		６８．後期衝動
	８．無題		６９．ヨクト
	９．爆弾の作り方		７０．街の灯を結ぶ
	１０．夏、消息不明		７１．生活感
	１１．隅田川		７２．ひろ
	１２．カルマ		７３．それはまた別のお話
ワンルーム叙事詩	１３．奇跡	世界収束二一一六	７４．タクシードライバー
	１４．クリスマス		７５．多数決
	１５．ポルノ映画の看板の下で		７６．季節は次々死んでいく
	１６．ポエジー		７７．分岐
	１７．ワンルーム叙事詩		７８．百年経ったら
	１８．コンビニ傘		７９．ライフイズビューティフル
	１９．真っ白な世界		８０．吐きそうだ
アノミー	２０．アノミー		８１．しらふ
	２１．さくら		８２．スピードと摩擦
	２２．理想の花		８３．エンディングテーマ
	２３．ピアノ泥棒		８４．花は誰かの死体に咲く
	２４．おもろうてやがて悲しき東口		８５．収束
	２５．この街で生きている	虚無病	８６．僕が死のうと思ったのは
千年幸福論	２６．デスゲーム		８７．星々の葬列
	２７．空っぽの空に潰される		８８．明日には大人になる君へ
	２８．古い SF 映画		８９．虚無病
	２９．渋谷の果てに地平線		９０．メーデーメーデー
	３０．夜の歌	地方都市のメメント・モリ	９１．ワードプロセッサー
	３１．逃避行		９２．空洞空洞
	３２．千年幸福論		９３．フィロソフィー
	３３．遺書		９４．水槽
	３４．美しき思い出		９５．空に歌えば
	３５．１４歳		９６．ハルキオンザロード
	３６．冬が来る前に		９７．悲しみ一つも残さないで
	３７．未来づくり		９８．バケモノ

ラブソング	３８．ラブソング		９９．リタ
	３９．ナガルナガル		１００．たられば
	４０．セビロニハナ		１０１．命にふさわしい
	４１．ナモナキヒト		１０２．ぼくら対せかい
	４２．ハレルヤ	ボイコット	１０３．拒否オロジー
	４３．アイスクリーム		１０４．とどめを刺して
	４４．アポロジー		１０５．夕立旅立ち
	４５．カラス		１０６．帰ってこいよ
	４６．ハルルソラ		１０７．さよならごっこ
	４７．祈り		１０８．月曜日
ねえママ あなたの言うとおり	４８．風に流離い		１０９．アルカホール
	４９．ジュブナイル		１１０．マスクチルドレン
	５０．春待ち		１１１．抒情死
	５１．性善説		１１２．死んでるみたいに眠ってる
	５２．ミサイル		１１３．リビングデッド
	５３．僕は盗む		１１４．独白
	５４．パーフェクトライフ		１１５．未来になれなかったあの夜に
あんたへ	５５．まえがき		１１６．そういう人になりたいぜ
	５６．あんたへ	シングルカップリング曲	１１７．或る輝き（季節は次々死んでいく）※１
	５７．匿名希望		１１８．自虐家のアリー（季節は次々死んでいく）
	５８．冷凍睡眠		１１９．風邪（スピードと摩擦）
	５９．ドブネズミ		１２０．名前（スピードと摩擦）
	６０．終わりで始まり		１２１．幽霊（命にふさわしい）
	６１．あとがき		１２２．数え歌（命にふさわしい）
			１２３．月光、街を焼く（空に歌えば）
			１２４．月が綺麗（リビングデッド）
			１２５．アイザック（さよならごっこ）
			１２６．それを言葉という（さよならごっこ）
		※２	１２７．ヒーロー

※１ シングルカップリング曲名の右横（）は、収録されているシングルのタイトル曲名。

※2 「ヒーロー」は、ベストアルバム『メッセージボトル』にのみ収録。

(参考：amazarashi official web site | discography http://www.amazarashi.com/disco/)

第二節 研究方法

秋田ひろむの歌詞における表現特性を明らかにするにあたって、今回は二つの観点から分析を行うこととした。「語彙分析」と「構成分析」である。始めに歌詞検索ソフト「Lyrics Master」で対象楽曲の歌詞を収集し、以下のように分析していく。

第一項 語彙分析

語彙分析は、KH coder というテキストマイニングソフトを用いて行う。まずは全楽曲に用いられている全ての語彙の中から使用頻度の高い語彙を抽出し、秋田の書く歌詞における使用語彙の特徴を探る。次に「共起ネットワーク」という機能を用いて、共に出てくることの多い語彙について調べていく。これは単語同士のつながりについて調べるものであり、それぞれの語彙がどのような文脈で、どのような意味で用いられているのかを知るための手がかりとなる。集計単位は「段落」とし、集計する語の品詞はデータの明瞭化を図るため「名詞」「動詞」「形容詞」の三つに絞った。集計結果表に表示する語は、共起関係上位50の語とした。

第二項 構成分析

構成分析は、まず初めに全ての楽曲をその主題ごとに分類したうえで行っていく。主題の分類については、「第二章 第二節 構成分析」の冒頭で詳しく説明する。構成分析の基礎として扱うデータは、楽曲の枠組みを構成する冒頭部・末尾の叙述の種類と、そこに心理記述・描写が含まれる場合の心理の種類、そして楽曲の各部分に描かれる状況や心理の内容である。これらを主題の分類と併せて集計し、主題ごとに構成の特徴をまとめたうえで、更なる検証が必要な要素を導き出し、分析を重ねていく。

叙述の種類については、野浪正隆氏の論文「物語文の構成分析試案」で論じられている分類の仕方を参考にする。歌詞には、背景設定があったり、人物の行動や心理などが描かれていたり、ストーリー性があったりと、小説や物語と通じるところがあるので、それらの構成要素についての分析方法が歌詞の構成要素について考える際にも適用できると考えたからである。以下、「物語文の構成分析試案」から一部を引用する。

> 小説・物語の三要素として「背景・人物・事件」が、知られている。「どんな時・所を設定しようか、どんな人物を設定しようか、どんな事件を起こそうか」と表現主体は、発想し、ストーリーを作っていくのだろう。また、構成を分析する際にも「状況設定部・人物設定部・事件の伏線・事件の山場・事件の終結部」などの用語によって、三要素の枠組みを用いることがある。たしかに、出来事の筋・事件の筋は、はっきりするのだが、それ以上のことは、はっきりしないまま取り残されてしまう。例えば、主題を三要素による構成分析から導出することができるかというと、それは、不可能なのである。
>
> 小説・物語文において主題と密接に関る要素は、主人公の心理である。心理に作用し、心理が作用する要素は、主人公の行動と、主人公の心理を「内界」とした場合の「外界」である。(「外界」では、言葉がこなれないので「状況」といいかえよう)
>
> この、「状況・心理・行動」という枠組みで、先の三要素をとらえなおしてみる。
>
> 背景＝状況(ただし、主人公・視点人物以外の人物の心理・行動を含む)
>
> 人物＝心理・行動(ただし、主人公あるいは視点人物の)
>
> 事件＝状況×(心理・行動)

新三要素の「状況」は、「背景」と「主人公・視点人物以外の人物の心理・行動」を含む。さらに風景や事物など、主人公・視点人物以外のものやことをすべて含む。「人物」は、主人公・視点人物の心理・行動だけを含む。主人公・視点人物以外の人物は、「状況」に含まれる。つまり、新三要素では、主人公・視点人物の「心理」を取り立てることになる。「事件」は、「状況」と「心理」・「行動」との関係としてとらえることができる。

野浪正隆「物語文の構成分析試案」
（http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~kokugo/nonami/ronbun/monogatari.html）

これに基づき、「状況」「心理」「行動」を軸として冒頭部・末尾の叙述の特徴をとらえ、楽曲の枠組みとなる部分の演出の仕方について考えていきたい。

楽曲の各部分に描かれる状況や心理の内容については、一つひとつの楽曲を 一般的な J ポップミュージックにおける「曲調」を基準としたパート分けの仕方に従って「I 番 A メロ」「I 番 B メロ」「I 番サビ」「2番 A メロ」「2番 B メロ」「2番サビ」「C メロ」「L（ラスト）サビ」の8つの部分に分けたうえで進めることとする。ただし amazarashi の楽曲には、一般的な楽曲の長さ（3～5分程度）の半分にも満たない程度の長さの「ポエトリーリーディング（詩の朗読）」調の楽曲が一定数含まれている。それらの楽曲は先程のパート分けの基準に当てはまらないうえ、ひとつの場面や感情を詳しく語ったものが中心となっており、状況や心理の推移が読み取れるものが極めて少ないため、この分析の対象からは除外した。

以上のような構成分析を行い、歌詞構成の傾向を探っていく。

第三節 分析のねらいと予想される結論

先にも述べたように、本研究の目的は、人生や社会における負の側面を鮮明に描き出しながらそれでもなお光に満ちた力強さをもつ歌詞の表現特性を捉え、秋田ひろむの書く歌詞のパターンを明らかにすることである。この目的を達成するには、秋田の描く「陰」と「光」との関わり合いを読み解くことが不可欠であると考えられる。

「語彙分析」では語彙同士の共起関係をつかみ、中でも、相反するイメージの語彙同士の共起関係に注意を払ってみていきたい。また、楽曲内で数多く使用される語には秋田の表現したいことの中心が表れていると予測されるので、それぞれの語がどのような文脈で用いられているかにも注意しながら、頻出語彙について考察していきたい。

「構成分析」では、amazarashi の楽曲が聴く者の心に強く働きかけてくるわけを、その構成に基づいて明らかにしていきたい。冒頭部・末尾における叙述の種類、そして「I 番 A メロ」から「I 番 B メロ」「I 番サビ」「2番 A メロ」「2番 B メロ」「2番サビ」「C メロ」「L（ラスト）サビ」にかけて描かれる状況や心理の推移について分析することで、導入とフィナーレの演出の仕方、流れの組み立て方などの特徴とその効果が見えてくるのではないだろうか。

今回の対象楽曲のひとつである「ライフイズビューティフル」という楽曲の歌詞にも登場するが（「**わいは今も歌っているんだ 暗い歌ばかり歌いやがってと人は言うが ぜってぇまけねぇって 気持ちだけで 今まで ここまで やってきたんだ**」）、amazarashi の楽曲は人々から「暗い歌」と評されることが多々ある。しかし、繰り返しになるが、私は彼らの楽曲に「光」を感じている。彼らの楽曲を「暗い」と感じる人、「光」を感じる人、相反する両者が存在することの理由も、以上のような語彙分析や構成分析を通して明らかにしていけるのではないだろうか。

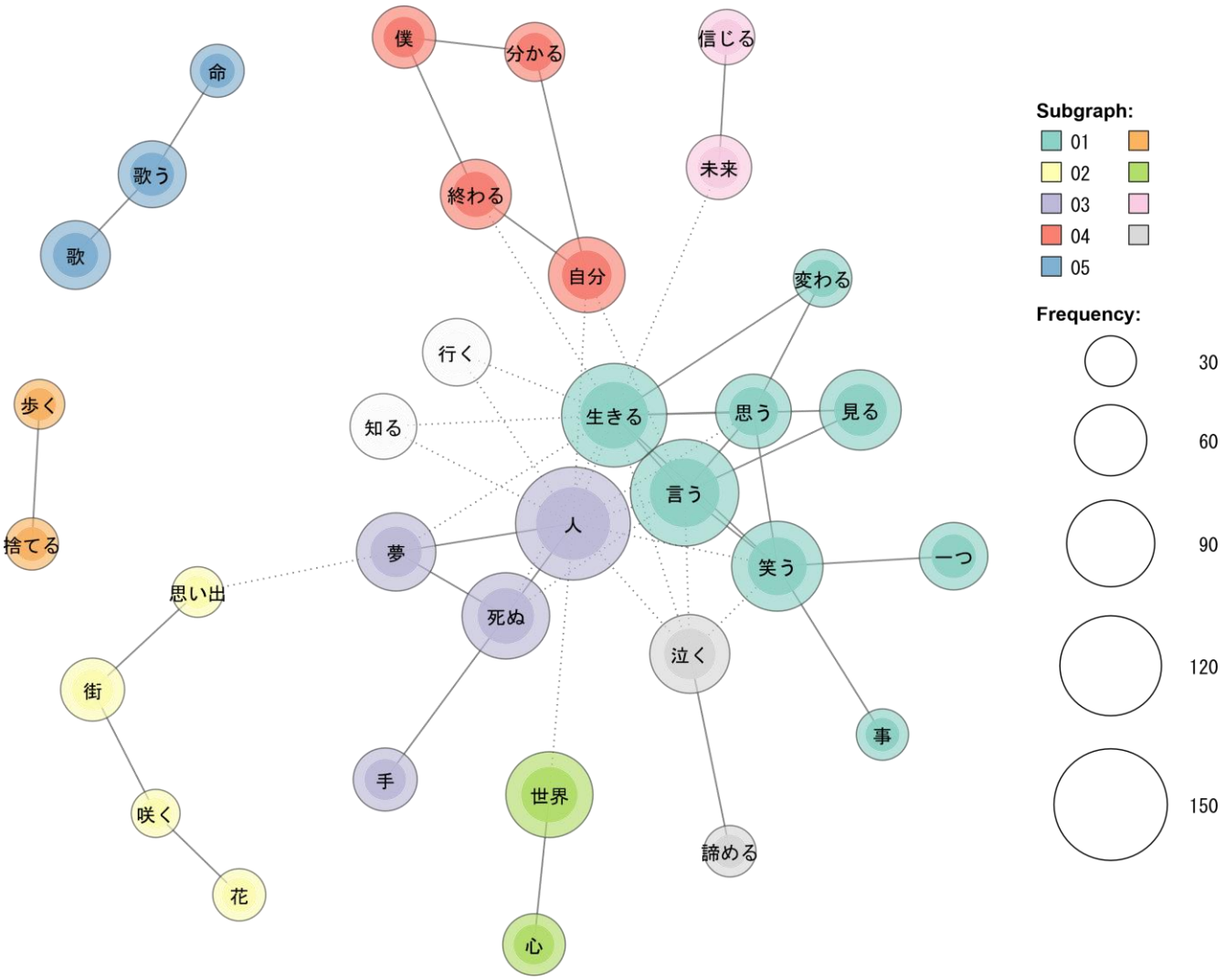
第二章 分析結果

本章では、本研究の基礎としたデータを、その説明と共にまとめていく。これらのデータを分析・解釈していく過程で新たに必要となって求めたデータについては、次章の考察内で適宜提示し、説明を加えていくこととする。

第一節 語彙分析

ここでは、KH coder を用いて収集した全楽曲を通しての各語彙の出現回数（上位50）と、語彙同士の共起関係についての表を示し、その結果をまとめる。

抽出語	出現回数		抽出語	出現回数
人	155		消える	52
言う	137		知る	51
生きる	131		未来	49
今	99		空	48
笑う	99		街	47
死ぬ	89		手	47
世界	88		僕	46
見る	83		心	45
夢	75		分かる	42
夜	75		風	41
泣く	74		忘れる	41
歌	72		過去	40
言葉	70		顔	39
自分	68		人間	39
無い	68		悲しみ	39
歌う	67		変わる	39
今日	67		夏	38
思う	66		愛	37
明日	63		嘘	37
人生	60		呼ぶ	37
終わる	58		信じる	37
涙	57		続く	37
全部	55		綺麗	36
一つ	54		出来る	35
行く	54		全て	35



頻出語彙としては、100回以上出現した語彙が「人」(155回)、「言う」(137回)、「生きる」(131回)の3つであった。続いて70回以上登場した語彙が「今」(99回)、「笑う」(99回)、「死ぬ」(89回)、「世界」(88回)、「見る」(83回)、「夢」(75回)、「夜」(75回)、「泣く」(74回)、「歌」(72回)、「言葉」(70回)の10個であった。

100回以上出現の頻出語彙を中心に共起関係をみていくと、「人」は「夢」・「死ぬ」と、「言う」は「生きる」・「笑う」と、「生きる」は「言う」・「思う」と強く共起している。それ以外の共起関係としては、「命」・「歌う」・「歌」の共起関係や、「歩く」・「捨てる」の共起関係、「思い出」・「街」・「咲く」・「花」の共起関係、「未来」・「信じる」の共起関係などがみられた。

第二節 構成分析

ここでは、先述した主な構成分析の結果を、楽曲の主題ごとにグラフ化してまとめていく。その前にまずは各主題の楽曲数と主題の分類基準について、具体的な歌詞の例を挙げながらまとめることとする。

各主題の楽曲数は以下の表の通りである。

アイデンティティ	25 曲
希望	25 曲
別れ	19 曲
風刺	15曲
人生	12曲
虚無	9 曲
挫折	6曲
その他	16曲

続いて、主題の分類基準についてまとめる。

アイデンティティ

自分が自分である所以、人としての尊厳などを主張する、またはそれらを守りたい、失くしたくないという思いを強く歌った楽曲。

受諾と拒絶 拒絶 拒絶 手は組めないぜ ただじゃ死なないぜ
許可されて生きる 命ではないよ ああ私の私
応答途絶 途絶 途絶 生きているなら声を聞かせて
徐々に蝕まれる暮らしの抒情詩 ああ詠い続けて
「抒情死」

分からないものは分からないし やりたくないことはやらないし
そう言ってら落伍者扱い 立派な社会不適合者
やり続けることの情熱も 今じゃ余計な不穏分子
純粋でいることの代償は つまり居場所が無いって事だ
行き場の無いイノセンス イノセンス 今に見てろって部屋にこもって
爆弾を一人作る 僕らの薄弱なアイデンティティー
ひび割れたイノセンス イノセンス こんなんじゃないって奮い立って
僕は戦う つまりそれが 僕等にとって唯一の免罪符
「爆弾の作り方」

希望

未来に希望を見出し、それに向かって進んでいくという決意・覚悟を歌った楽曲。

未来は 僕自身が 切り開いてみせるよ神様
はやく 涙拭けよ 笑い飛ばそう 僕らの過去
そうだろう 今辛いのは 戦ってるから 逃げないから
そんな あんたを 責めることができる奴なんて どこにもいないんだぜ
「あんたへ」

日々が過ぎて 年が過ぎて 大切な人達が過ぎて
急がなくちゃ 急がなくちゃ なんだか焦って つまずいて
もう駄目だ 動けねぇよ うずくまってても時は過ぎて
考えて 考えて やっと僕は僕を肯定して
立ち上がって 走り出して その時見上げたいつもの空
あの頃とは違って見えたんだ あの日の未来を生きてるんだ
全てを無駄にしたくないよ 間違いなんて無かったよ
今の僕を支えてるのは あの日挫けてしまった僕だ
「終わりで始まり」

別れ

人との別れ、故郷との別れ、慣れ親しんだ生活との別れなど、何か身近にあったものを失くしたときの悲しみや寂しさ、次の場所へ進む気持ちなどを描いた楽曲。

ただ 君がいなくなったことで 出来た空白を埋められずに
白黒に見える街の景色 決して雪のせいではないのでしょう
悲しいことなんて あるものか あるものか 振りほどいて僕は 急いで出かけなくちゃ（略）
雪は今日も止むことを知らず 急ぐ僕の足はもつれる 笑い合った長い月日も 確かに分かり合えた何かも
全部嘘だと言い切れたら 僕は簡単に歩けるのに でも大丈夫 ちゃんと 前に進めているよ
初雪が 風に吹かれて 僕らの街 通り過ぎただけ
僕はそれに 少し泣いただけ 冬の風に 心揺れただけ
「初雪」

辛さなら背負えるから 痛みなら分け合えるから でも君のさだめまでは 肩代わりできなかった
別れは何度目でも 相変わらず悲しいから 別れる振りをするんだよ さよならの遊びだよ
いつか必ず会えるって 自分を騙す遊びだよ
さよならごっこは慣れたもんさ でも手を振ったら泣いちゃった
僕らの真っ赤な嘘だけが 濡れる 濡れる そして朝が来る
離れ離れになるってことは 一度は一つになれたかなあ
諦めと呼べば後ろめたい さだめ さだめ そう君は呼んだ
「さよならごっこ」

風刺

世の中の状況・風潮などに対して、皮肉を交えながら批判的な立場で歌う楽曲。

茫漠たる享楽の混濁する網膜を 老若男女すべからく漂白するコンダクト
思考なきマスゲーム 堕落の行進曲 反旗も空しく 価値と数の暴力
否応もなく 突き立てられる喉仏 己を殺せ 無明の権化 無能、クズも仏
色めき立つ世俗共の純粋なるアンチで 近代合理主義のここどん詰まりにて
テレビの向こうの多数の犠牲者には祈るのに この電車を止めた自殺者には舌打ちか
溜め息に似た自覚無き悪意が ファストフードの油の匂いみたいに飽和している東京
「メーデーメーデー」

満たされた時代に生まれた と大人は僕らを揶揄した
どこに安寧があるのだと 気付いた時にはもう遅かった
不穏な煙が立ち昇り あれは何だと騒ぎ立てた
奴から順に消えて行った 今じゃ町ごと墓場だ
愛すら知らない人が 居るのは確かだ
それを無視するのは何故だ それを無視するのが愛か?
ATM 電気椅子 ストレルカとベルカ 紙幣と硬貨 愛こそ全て
再来世と来世 社会性 人の指の首飾り 花飾り 愛こそ全て 信じ給え
「ラブソング」

人生

人生全体を振り返る、または、人生そのものについて考え、生きるということの根本にまで思いを馳せる楽曲。

あっけなく命や夢が消える星で ありふれた良くある悲しい話
そんなもんに飽きもせず泣き笑い 人生は美しい
一つを手に入れて一つを失くして いつも何か足りないって泣いている
だけど後悔なんてしてやるものか 人生は美しい
「ライフイズビューティフル」

虚しさに生きてその最中に笑えよ さよならは一瞬だ その最中に歌えよ
朽ちる命抱きしめて泣きじゃくる晩は 踏みしめてる土に祈れ生命賛歌
綺麗でもなんでもねえ 命が今日も笑えば
人の傲慢の肯定 逃れられぬ命を 逃げるように生きてよ
笑い合えたこの日々も 失くした日の痛みも
なんとか死にきれそうなこんな人生も 一つ残らず土に還るのだ
花は誰かの死体に咲く
「花は誰かの死体に咲く」

虚無

生きる気力を見失い、茫然と現状に立ち尽くす様子を歌った楽曲。

遮光カーテンに真夜中の染み　空白を埋める為の慣性運動
ぼたぼたと滲んでいく鼻血　遮断された生活の孤立
はためく企業の旗と不良カラス　自覚のない自堕落
死んでいく感性　値札の付いた幸福　間接的存在否定
虚言　悲しみ　悲しみ

「或る輝き」

やりたいこと　やりたくないこと　やれること　やれないこと
面倒くさくなってほっぽって　選択肢すらなくしちゃって
運命なんて他に選択肢が無かったってだけ
必然なんてなんとなくなるようになったってだけ
ごめんちょっと調子が悪いだけなんだよ　本当に
かれこれ数時間　便器にしがみついて　朦朧とうわ言

「風邪」

挫折

自分の無力を突きつけられ、現実に打ちひしがれる様子を歌った楽曲。

ポルノ映画の看板の下で　ずっと誰か待ってる女の子
ふざけた日常　マフラー代わりにしても　かじかんだその未来　ぬくむ事無く
夢なんてもんは偶像だ　それを崇める私、背徳者
願えば叶うよ　叶うよ　叶うよ　うるせぇ背後霊　才能不在

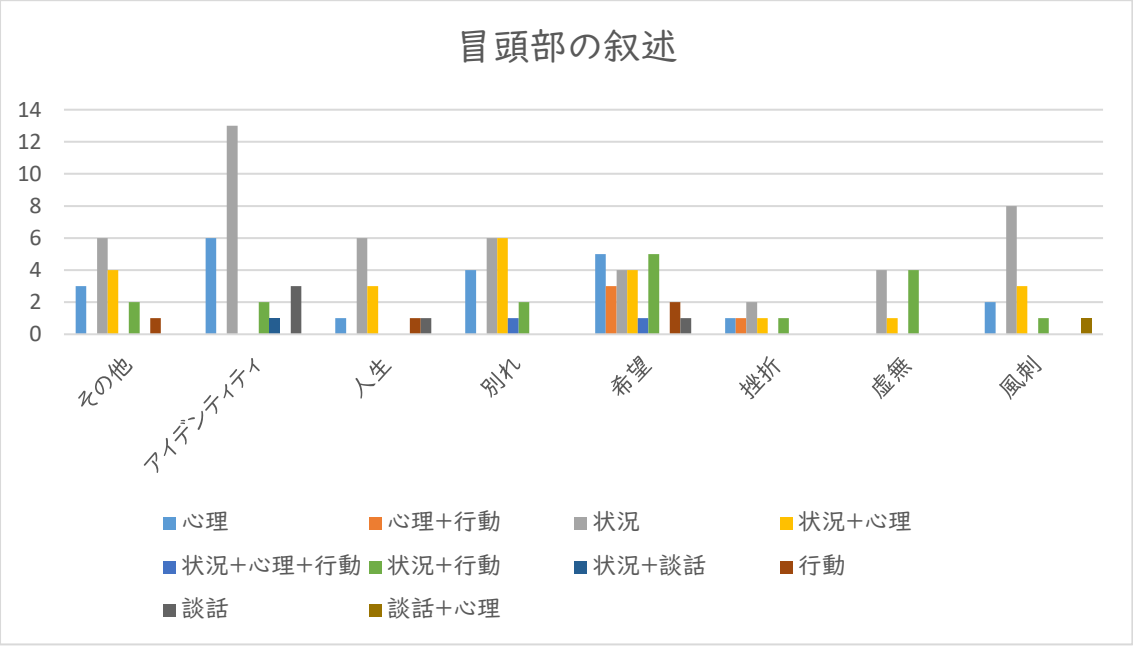
「ポルノ映画の看板の下で」

解体作業、ソープ、オフィス、世田谷の小学校
豊かな心、情操教育で現実を描こう
アスベスト吸い込み、渡る現場は鬼ばかり
高所作業、安全帯無しで人生綱渡り　こんなはずじゃなかった
頭で繰り返し　これで何百回目かの人生の振り出し　もう無理かもね
祈る気力もない流星　あの日期待した僕の才能、下方修正

「しらふ」

〇冒頭部の叙述と末尾の叙述

ここでは、楽曲冒頭部と末尾における叙述の種類について分析し、楽曲の主題ごとに集計した結果についてまとめる。「冒頭部」「末尾」の定義としては、楽曲始めの2フレーズ・最後の2フレーズまでを基準とした。なお、その主題の楽曲内において最も多かった叙述の種類には下線を引いている。



冒頭部では、「アイデンティティ」で「状況」が13曲、「心理」が6曲、「談話」が3曲、「状況+行動」が2曲、「状況+談話」が1曲となっていた。

「人生」では、「状況」が6曲、「状況+心理」が3曲、「心理」「行動」「談話」がそれぞれ1曲ずつであった。

「別れ」では、「状況」「状況+心理」が共に6曲、「心理」が4曲、「状況+行動」が2曲、「状況+心理+行動」が1曲であった。

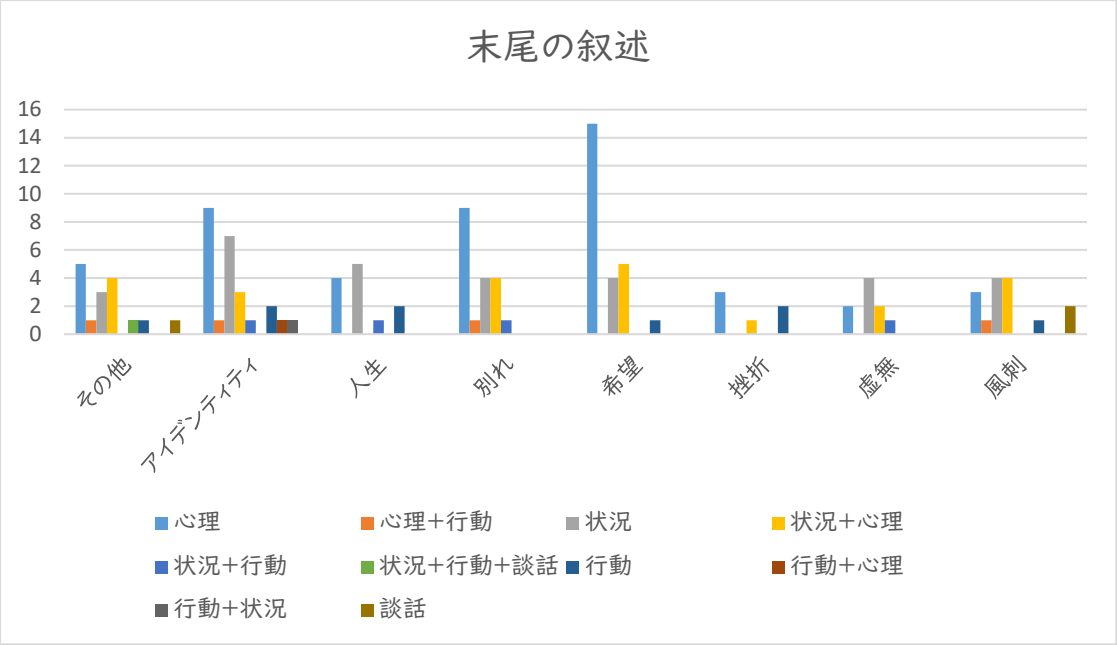
「希望」では、「心理」「状況+行動」が共に5曲、「状況」「状況+心理」が共に4曲、「心理+行動」が3曲、「行動」が2曲、「状況+心理+行動」「談話」が共に1曲であった。

「挫折」では、「状況」が2曲、「心理」「心理+行動」「状況+心理」「状況+行動」がそれぞれ1曲ずつであった。

「虚無」では、「状況」「状況+行動」が共に4曲、「状況+心理」が1曲であった。

「風刺」では、「状況」が8曲、「状況+心理」が3曲、「心理」が2曲、「状況+行動」「談話+心理」がそれぞれ1曲であった。

「その他」では、「状況」が6曲、「状況+心理」が4曲、「心理」が3曲、「状況+行動」が2曲、「行動」が1曲であった。



末尾では、「アイデンティティ」で「心理」が9曲、「状況」が7曲、「状況+心理」が3曲、「行動」が2曲、「行動+心理」「状況+行動」「行動+心理」「行動+状況」がそれぞれ1曲ずつとなっていた。

「人生」では、「状況」が5曲、「心理」が4曲、「行動」が2曲、「状況+行動」が1曲であった。

「別れ」では「心理」が9曲、「状況」「状況+心理」が共に4曲、「心理+行動」「状況+行動」が共に1曲であった。

「希望」では、「心理」が15曲、「状況+心理」が5曲、「状況」が4曲、「行動」が1曲であった。

「挫折」では、「心理」が3曲、「行動」が2曲、「状況+心理」が1曲であった。

「虚無」では、「状況」が4曲、「心理」「状況+心理」が共に2曲、「状況+行動」が1曲であった。

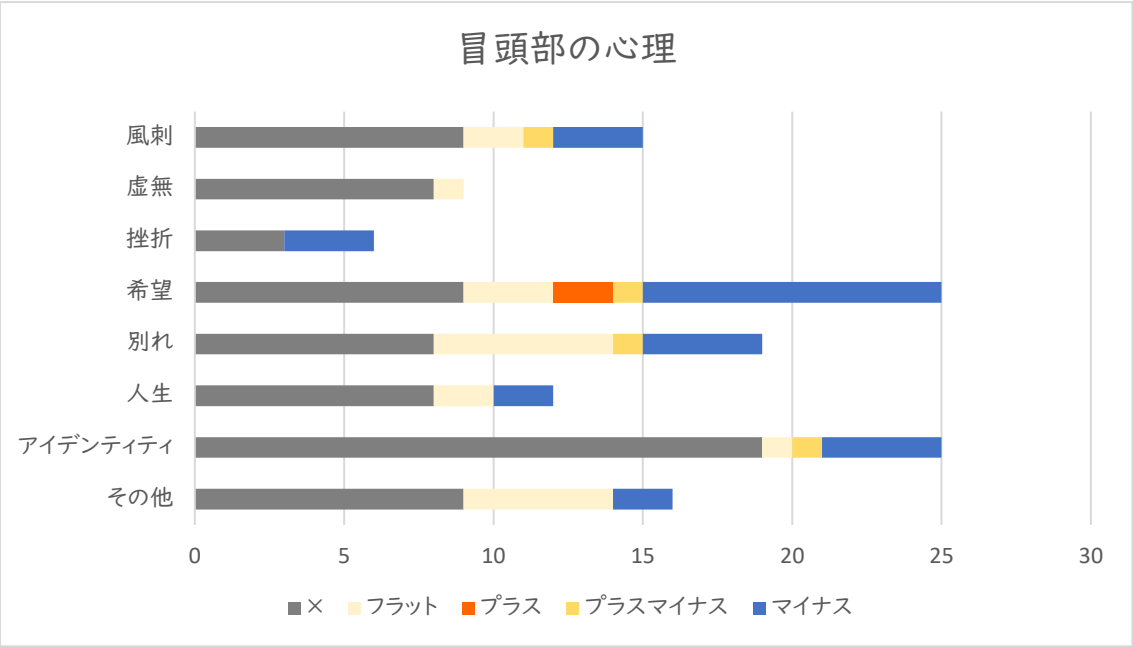
「風刺」では、「状況」「状況+心理」が共に4曲、「心理」が3曲、「談話」が2曲、「心理+行動」「行動」が共に1曲であった。

「その他」では、「心理」が5曲、「状況+心理」が4曲、「状況」が3曲、「心理+行動」「状況+行動+談話」「行動」「談話」がそれぞれ1曲ずつであった。

〇冒頭部の心理と末尾の心理

ここでは、冒頭部及び末尾における叙述の種類に「心理」の要素が含まれていたものについて、その心理が「プラス（上向き）」の意味合いをもつものなのか「マイナス（下向き）」の意味合いをもつものなのかを分析し、主題ごとに集計した結果をまとめる。なお、冒頭部及び末尾における叙述の種類に「心理」が含まれなかったものは「×」として集計している。以下の解説においては、「×」の曲数への言及は割愛する。

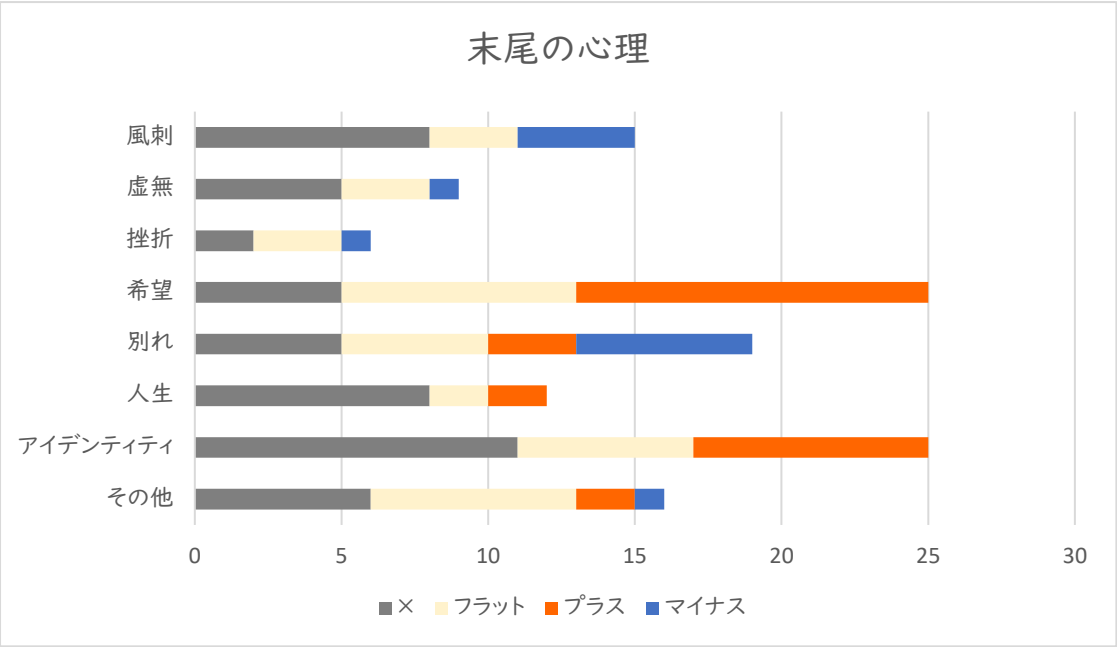
また、プラスにもマイナスにも傾かない率直な状況判断や疑問が心理として描かれている場合は「フラット」として集計している。プラスの心理とマイナスの心理が共に描かれている場合は「プラスマイナス」として集計している。



冒頭部では、「アイデンティティ」で「マイナス」が4曲、「フラット」と「プラスマイナス」が共に1曲であった。
「人生」では、「フラット」と「マイナス」が共に2曲であった。
「別れ」では、「フラット」が6曲、「マイナス」が4曲、「プラスマイナス」が1曲であった。
「希望」では、「マイナス」が10曲、「フラット」が3曲、「プラス」が2曲、「プラスマイナス」が1曲であった。
「挫折」では、「マイナス」が3曲であった。
「虚無」では、「フラット」が1曲であった。
「風刺では、「マイナス」が3曲、「フラット」が2曲、「プラスマイナス」が1曲であった。
「その他」で「フラット」が5曲、「マイナス」が2曲であった。

以下に、各分類における歌詞の具体例を挙げる。

プラス・・・「**笑った日のことを思い出した**」(「祈り」),「**好きな人ができた**」(「命にふさわしい」)
マイナス・・・「**自分嫌い**」(「ジュブナイル」),「**もう何もかも嫌になった**」(「逃避行」),
「**ささくれて溶け出すこころ**」(「夏の日、残像」),「**裏切られた気分で**」(「花は誰かの死体に咲く」)
プラスマイナス・・・「**希望と挫折**」(「ハレルヤ」),「**哀楽**」(「アイザック」),「**人愛おしみ、人に失意**」(「数え歌」)
フラット・・・「**生きる意味とは何だ**」(「吐きそうだ」),「**暗いところに隠れたら誰にも見つからないと思ってた**」
(「アポロジー」),「**雨が近いことを悟る**」(「水槽」),「**今がその時なのかもしれない**」(「分岐」)



末尾では、「アイデンティティ」で「プラス」が8曲、「フラット」が6曲であった。
「人生」では、「フラット」と「プラス」が共に2曲であった。
「別れ」では、「マイナス」が6曲、「フラット」が5曲、「プラス」が3曲であった。
「希望」では、「プラス」が12曲、「フラット」が8曲であった。
「挫折」と「虚無」では、「フラット」が3曲、「マイナス」が1曲であった。
「風刺」では、「マイナス」が4曲、「フラット」が3曲であった。
「その他」で「フラット」が7曲、「プラス」が2曲、「マイナス」が1曲であった。

以下に、各分類における歌詞の具体例を挙げる。

プラス・・・「**最後の最後に笑えたらそれでいいんだよ**」(「ジュブナイル」),「**この始まりを照らしてくれ**」(「マスクチルドレン」),「**痛み多き僕の過去に終止符を**」(「匿名希望」),「**僕は僕を愛したい**」(「ポエジー」)
マイナス・・・「**悲しみ　悲しみ**」(「或る輝き」),「**うるせぇ背後霊　才能不在**」(「ポルノ映画の看板の下で」),「**見てみろよ　酷い世界だろ**」(「クリスマス」),「**大嫌いだよ　美しき思い出**」(「美しき思い出」)
フラット・・・「**それは果たして僕なんだろうか**」(「たられば」),「**下手な絵空事ばかりをずっと空想する**」(「冷凍睡眠」),「**裏庭の堅い実が真っ赤になったら教えて**」(「百年経ったら」)

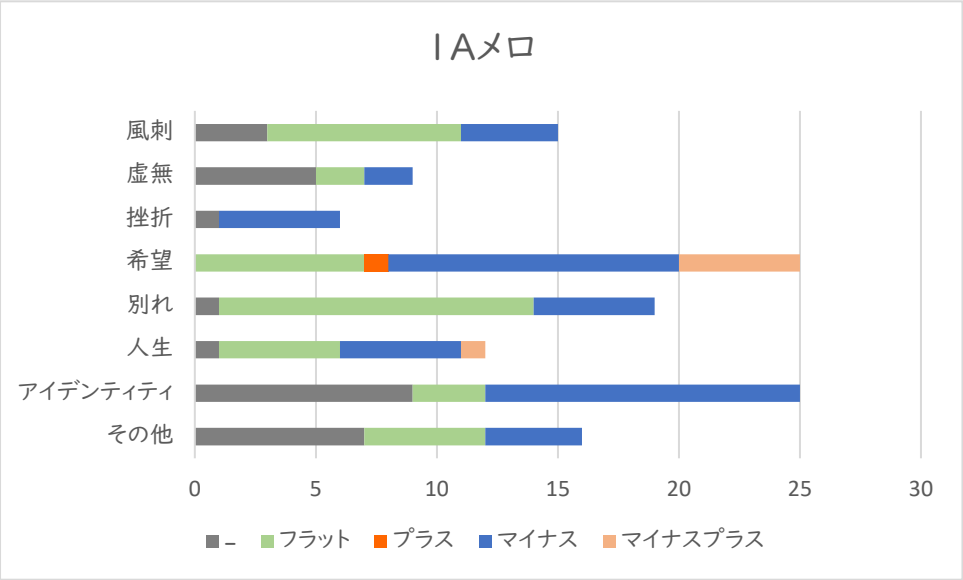
次は、分析範囲を楽曲全体にまで広げ、各部分で描かれている状況や心理の種類についてみていく。

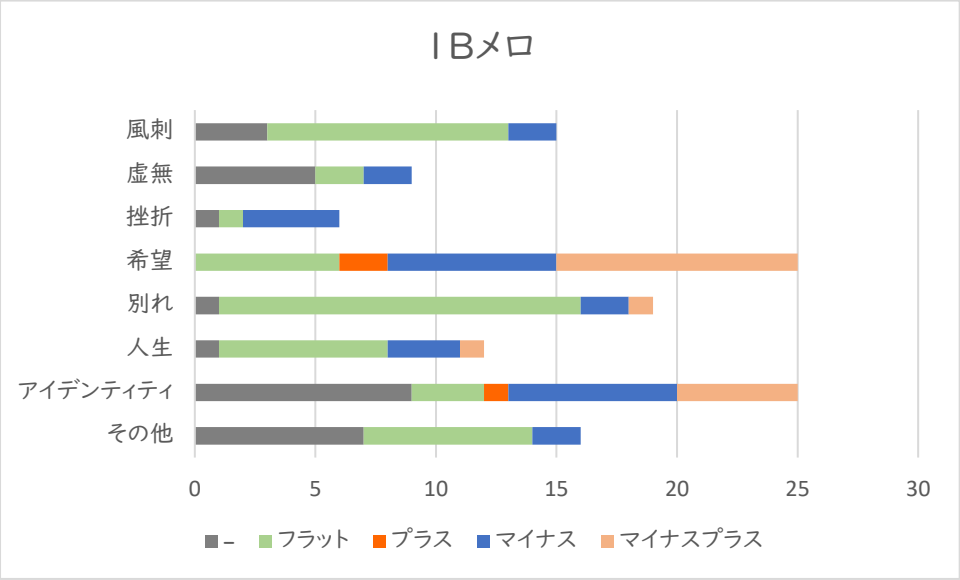
〇各部分に描かれている状況や心理

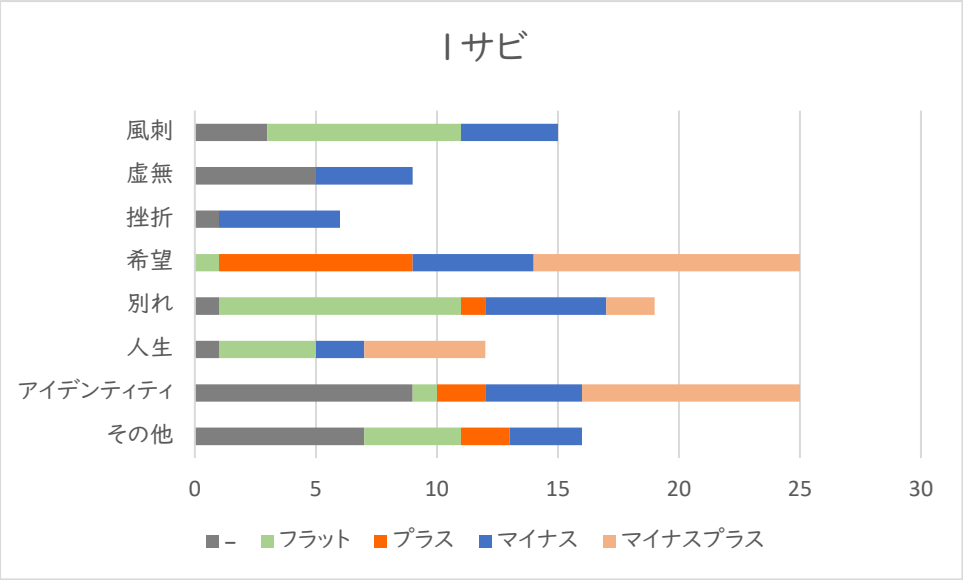
ここでは、「I番 A メロ」「I番 B メロ」「I番サビ」「2番 A メロ」「2番 B メロ」「2番サビ」「C メロ」「L（ラスト）サビ」それぞれの部分において、どのような状況や心理が描かれているのかを分析し、その内容を「フラット」「プラス」「マイナス」「マイナスプラス」などに分類し整理して主題ごとに集計した結果をまとめる。なお、各部分の区別がない楽曲や、その楽曲内に存在しない部分は「–」としている。以下、分類基準について説明する。

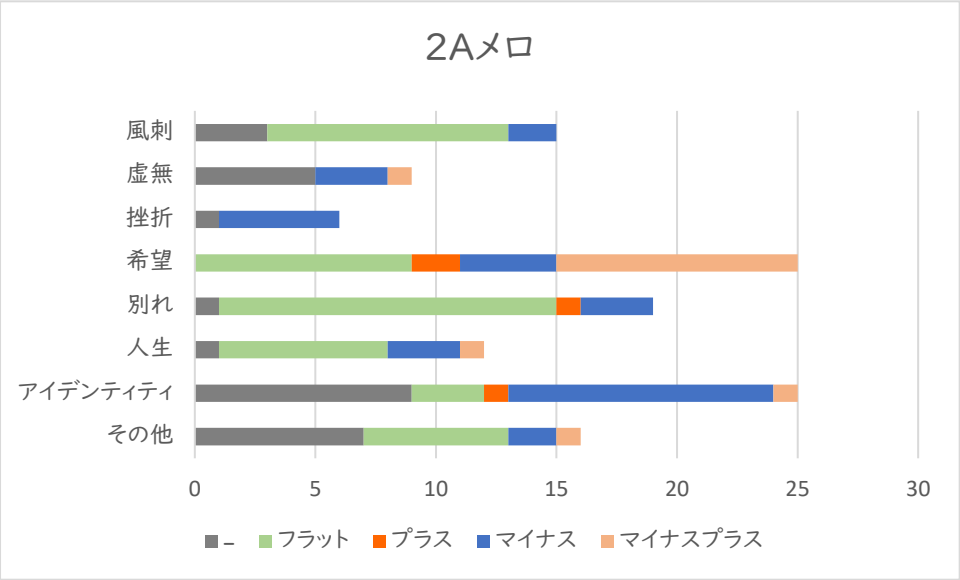
「フラット」とは、単に状況や状態の記述・描写のみで、そこに主観的な価値判断を加えていないものを指す。「プラス」とは、現在が良い状況・状態で意識が上を向いている又はその状況・状態を肯定的に捉えているものを指す。なお、過去の良くない状況・状態が描かれているが、現在は状況・状態が好転しており、意識が上向きで捉え方が肯定的なものも含めている。「マイナス」とは、現在が良くない状況・状態で意識が下向き・捉え方が否定的なものを指す。「マイナスプラス」とは、現在良くない状況・状態だが意識は上向き・捉え方が肯定的なもの、又は意識が下向きから上向きへ変化する様子が描かれているものを指す。「プラスマイナス」は、全楽曲の中で一曲（「冷凍睡眠」）のみにみられるもので、プラスのイメージを否定してマイナスへ落としているものを指す。

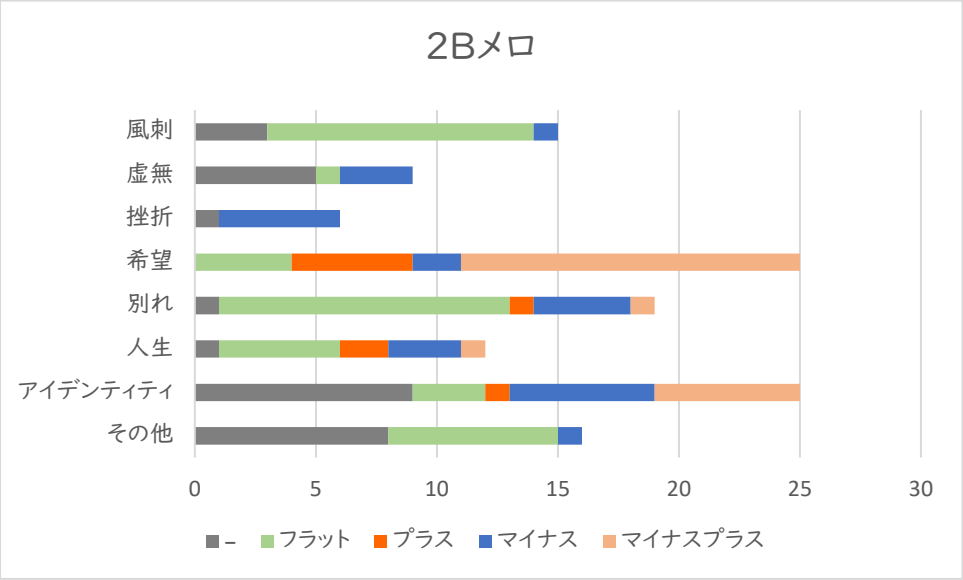
集計結果は以下の通りである。

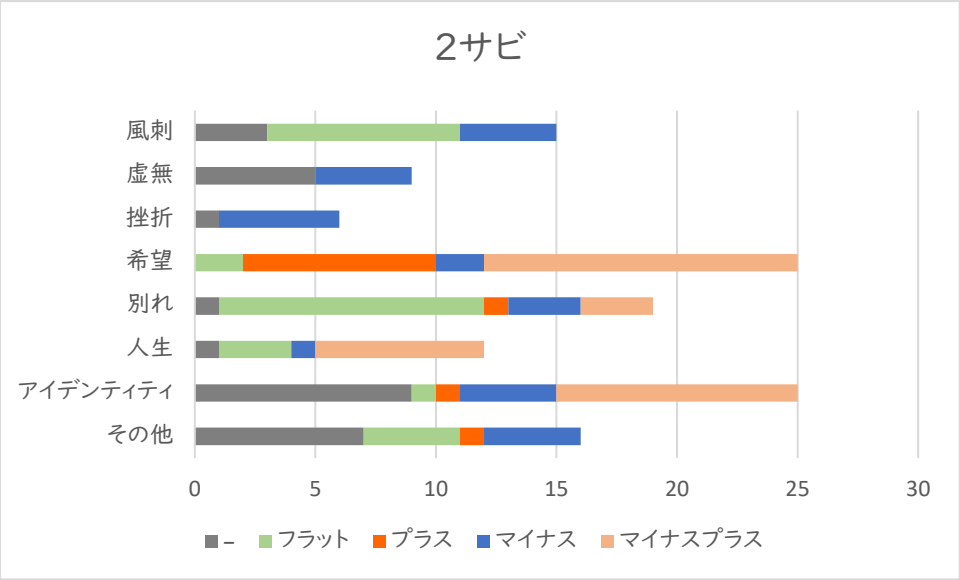


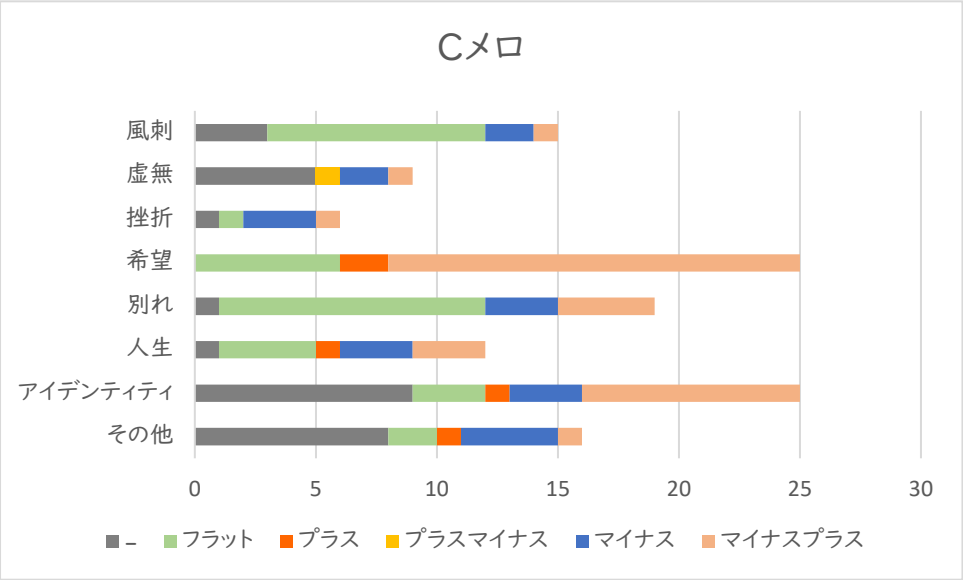


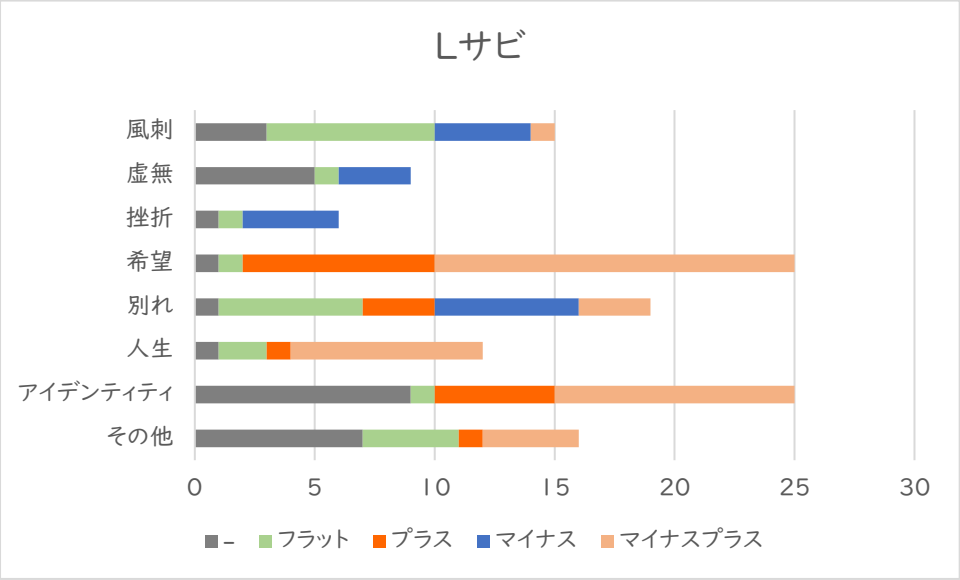

Ⅰサビ
風刺
虚無
挫折
希望
別れ
人生
アイデンティティ
その他
0
5
10
15
20
25
30
–
フラット
プラス
マイナス
マイナスプラス


2Aメロ
風刺
虚無
挫折
希望
別れ
人生
アイデンティティ
その他
0
5
10
15
20
25
30
–
フラット
プラス
マイナス
マイナスプラス


2Bメロ
風刺
虚無
挫折
希望
別れ
人生
アイデンティティ
その他
0
5
10
15
20
25
30
–
フラット
プラス
マイナス
マイナスプラス


2サビ
風刺
虚無
挫折
希望
別れ
人生
アイデンティティ
その他
0
5
10
15
20
25
30
–
フラット
プラス
マイナス
マイナスプラス


Cメロ
風刺
虚無
挫折
希望
別れ
人生
アイデンティティ
その他
0
5
10
15
20
25
30
–
フラット
プラス
プラスマイナス
マイナス
マイナスプラス


Lサビ
風刺
虚無
挫折
希望
別れ
人生
アイデンティティ
その他
0
5
10
15
20
25
30
–
フラット
プラス
マイナス
マイナスプラス

第三章 考察

まずは、語彙分析の結果について考察する。まずは、頻出語彙上位三位の語について考えていく（7頁参照）。

「人」という語彙が155回出現で再頻出であることは、amazarashi が人間の生き様や喜怒哀楽を歌っている以上妥当なものだといえるだろう。

137回出現で二番目に頻出の語彙である「言う」には、秋田の言葉に対する執着・思い入れが表れているといえる。以下、5曲から一部歌詞を引用する。

期待出来ない時代に 期待されなかった僕らは
「あいつはもう終わりだ」と言われながら
屈折した尊厳はまるで青く尖るナイフだ（「それを言葉という」）

「用がないならもう電話はしないで」 昔付き合ってたあの娘は言う
僕にはすがるもの幾つあるだろう 空しくなるから考えるの止めた（「ヨクト」）

お前なんかどこか消えちまえと 言われた時初めて気付いた
行きたい場所なんて何処にもない ここに居させてと泣き喚いた（「自虐家のアリー」）

「誰だお前は」と言われ続けて 赤字のライブで、だるい社会で
ラジオに雑誌にインターネット 誰だお前は？誰なんだ僕は？（「後期衝動」）

「誰だお前は」と言われたって お前が先に名乗れよ（「名前」）

以上は、「他人の言葉」に着目した歌詞の例である。他人から投げかけられた言葉ひとつに苦しんだり、憤ったり、突き動かされたりする様が描かれている。上記5曲のうち「自虐家のアリー」以外の4曲は楽曲内における主体が秋田本人となっているが、その歌詞には、言葉一つひとつを敏感に受け取り、心を動かされ、時には強く執着する彼の人物像が表れているといえるだろう。2014年リリースの「後期衝動」で触れられた「**誰だお前は**」という言葉に2015年リリースの「名前」で再び言及しているところからも、ひとつの言葉への執着が伺える。前者では「**誰なんだ僕は？**」と自問自答をしていたのに対し、後者では「**お前が先に名乗れよ**」と反発的な言葉を返していることから、「後期衝動」での自問自答を経て、自分は自分なのだということをはっきりと自覚し、そこに揺るぎない意志をもつようになったのだと解釈することができる。

このような心境は、「ひろ」という楽曲にも描かれている。以下、「ひろ」の一部歌詞を引用する。

ガキみたいって言われた 無謀だって言われた それなら僕も捨てたもんじゃないよな
誰も歩かない道を選んだ僕らだから 人の言う事に耳を貸す暇はないよな

ここでは、「**ガキみたい**」「**無謀だ**」という他者からの言葉について言及されている。それらの言葉がはじめから全く気にならなかったのなら、「**人の言う事に耳を貸す暇はないよな**」と言い聞かせるように歌う必要はない。それらの言葉に言及しているということは、「**ガキみたい**」「**無謀だ**」と嘲笑う言葉を敏感に受け取り、そのうえで自分自

身と向き合って「**僕も捨てたもんじゃない**」「**誰も歩かない道を選んだ僕らだから**」という考えにたどりついたということなのだ。このように、他者からの言葉に言及した部分では、その言葉によって良くも悪くも心を動かされ、それをきっかけに自分自身と向き合っていく様が描かれているものが目立った。

では、自分自身の言葉に対してはどのような考えをもっているのか。以下、5曲から一部歌詞を引用する。

「心にも無い事言って」って心に無いなら言えねぇよ
僕は伝える事さげすんだりしない それを届けて
死に損なった朝が眩しい 出掛けさせられてる毎日に
千切れた涙を銃弾としてこめろ それを言葉という（「それを言葉という」）

嫌なこと嫌って言うの そんなに自分勝手かな
それならば僕は息を止めて潜るよ
君の胸の内の深さには 遠く遠く及ばないとしても（略）
好きなこと好きって言うの こんなに難しかったっけ
それならば僕は息を止めて潜るよ
君の胸の内の深さには 遠く遠く及ばないとしても（「月曜日」）

大事なもの大事と言え 君は 進む 進む 進む（「ナガルナガル」）

歌うなと言われた歌を歌う 話すなと言われた言葉を叫ぶ（「ワードプロセッサー」）

初期衝動もとっくに消えた 「今に見てろよ」って今も過ぎた
だからと言って惰性ではなくて 言わざるをえない言葉について（「後期衝動」）

「**銃弾**」は他者を攻撃するためのものであり、自分を守るためのものでもある。「**千切れた涙**」を「**銃弾**」として込めたものを「**言葉**」と呼ぶ秋田は、苦悩や悔しさを原動力として、自分を嘲笑った世間に反撃を試み、自分自身を保ち続けるための自己表現の手段として「**言葉**」を捉えていると解釈できる。「**嫌なこと**」を「**嫌って言う**」、「**好きなこと**」を「**好きって言う**」、「**大事なもの**」を「**大事と言**」うことは、自己の存在を保ち、守ることにつながり、「**話すなと言われた言葉を叫ぶ**」ことは、「**話すな**」と彼を弾圧したものに対する抵抗・反撃となる。高い壁に直面し、無力を痛感して「**初期衝動**」が消えてしまってもなお「**言わざるをえない言葉**」とは、自分を表現し、自分の存在を生かし続けるための言葉なのである。抵抗や反撃は言わずもがな多大な労力が求められるものであり、それには少なからず痛みが伴う。秋田は、自分自身の言葉を話し、伝え、自分らしく生きていくことの難しさやそれに伴う苦悩を痛いほど知っていて、それでも自分はそうありたいと強く願っているのだ。

このような秋田の生き方は、131回出現で三番目に頻出の「生きる」という語彙の使われ方にも表れている。以下、3曲から一部歌詞を引用する。

受諾と拒絶 拒絶 拒絶 手は組めないぜ ただじゃ死なないぜ
許可されて生きる 命ではないよ ああ私の私（「抒情死」）

不完全な青春終えて　不完全な夢を見て
不完全な挫折の末に　不完全な大人になって
でも不完全なやりかたで　不完全なりに生きてきた　君自身は疑いようも無い（「パーフェクトライフ」）

もう無理だって言うな　諦めたって言うな　そんな事僕が許されねえよ
他に進むべき道なんてない僕らにはさ　お似合いの自分自身を生きなきゃな（「ひろ」）

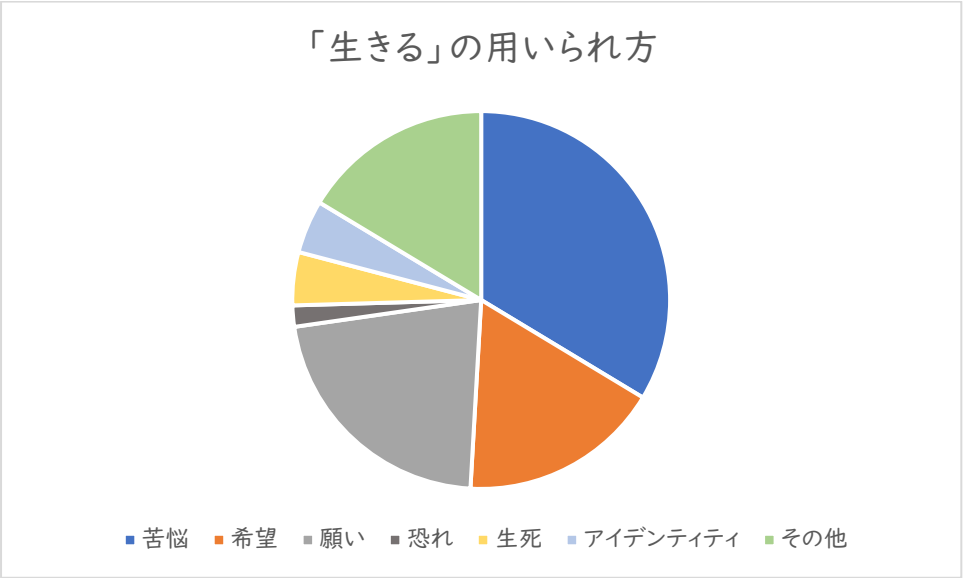
「**許可されて生きる命ではないよ**」には、自分は紛れもない自分の意志で「**私の私**」を生きているのだという強い主張が含まれている。「パーフェクトライフ」と「ひろ」の歌詞からは、決して自分自身を諦めることなく、「**不完全なやりかたで　不完全なりに**」、「**お似合いの自分自身**」を生きていくのだという意志が伺える。

しかし、そのような意志を常に持ち続けることは難しい。時には「生きる」ことに絶望し、一歩も前に進めなくなることもある。そのような側面も、秋田は誤魔化さずに描き出す。以下、2曲から一部歌詞を引用する。

今夜生まれてくる命と　死んでしまう命
そして懸命に輝く命と　無駄に生き長らえる僕
「こんな夜は消えてしまいたい」とよく言うけれど
お前なんか消えてしまえ　何で今日まで生きてたんだ（「奇跡」）

自由に生きたいと思えば思うほど　向かい風は勢いを増した
結局どこに行ったって　問題はそれなりにあるもんだ（「逃避行」）

以上の歌詞では、「生きる」という言葉に「**無駄に**」といったマイナスイメージの言葉がかかっていたり、「**自由に生きたい**」と思うことが「**向かい風**」といった困難につなげられていたりしている。このような文脈に着目し、改めて全楽曲内における「生きる」という言葉の用いられ方を整理すると、以下のようになった。なお、一つの楽曲内において全く同じフレーズの繰り返しに複数回使用されているものはまとめて一つとして集計している。



「生きる」ことに伴う苦悩が描かれているものが37曲で、全体の34%を占めていた。「生きる」ことに対する前向きな姿勢や希望が描かれているものが19曲（19%）、「こんな風に生きたい」という願いが描かれているものが24曲（22%）、「生きる」ことに対する恐れが描かれているものが2曲（2%）、生と死について言及しているものが5曲（5%）、生きていくうえでのアイデンティティについて言及されているものが5曲（5%）、その他が18曲（16%）であった。以下、用いられ方の種類ごとに歌詞の例を挙げる。

<苦悩>

息苦しいのは ここが生きる場所ではないから 僕ら地球外生命かもね（「月曜日」）

どっかで諦めていて 無表情に生きている
あまりに空っぽすぎて 途方に暮れちまうな（「もう一度」）

あの日救った世界の続きを あの日うち倒した世界のその後を
苦悩しながら 僕ら懸命に生きてた（「ぼくら対せかい」）

死にたい 死にたい と言って死ねなかった僕らが生きる今日が
こんなに白々しいものだと伝えたい（「ポエジー」）

<希望>

掴んだものはすぐにすり抜けた 信じたものは呆気なく過ぎ去った
それでも、それらが残していった、この温みだけで この人生は生きるに値する（「空に歌えば」）

結局歩き続けて その向こうで光が射して
その時僕らは思うだろう「今まで生きていて良かった」（「夜の歌」）

それでいいや 僕らは 希望も苦悩も抱えて この街で生きている
これからも生きていく（「この街で生きていく」）

<願い>

まるで生きてるなんて感じねぇ まるで誰かの夢を見てるみてぇ
まして喜びなんて信じねぇ こんな僕でも今を生きてみてぇ（「ハレルヤ」）

辛いことや悲しいことは 時間が解決してくれると言うけれど
嬉しいことや楽しいことも 少しずつ薄れてしまうよ
だったら明日のことだけ 考えて生きていきたいな（「美しき思い出」）

人の傲慢の肯定 逃れられぬ命を 逃げるように生きてよ（「花は誰かの死体に咲く」）

<恐れ>

日常は徐行ぎみ 恐る恐る生きる意味（「あとがき」）

張り裂けた胸はくっつかない セロハンテープでとめた心
またいつ剥がれるのかと 今日もびくびくしながら生きるぜ（「爆弾の作り方」）

<生死>

ハタネズミがサカナを喰らえば 猛禽類が噛り付いて空へ誘った
逆光の太陽が燃え盛る 生き死にの律動（「収束」）

生きることと死んでしまうこと 考えだすと 頭がおかしくなりそうだ（「美しき思い出」）

<アイデンティティ>

僕が僕として生きてる理由を 身に纏う証明 実存 実存 実存（「夕日信仰ヒガシズム」）

秋田は「生きる」うえでの痛みや苦悩、恐れを鮮明に描いたうえで、それでも生きることに希望を見出し、自分らしく、笑って生きていたいという思いを描くことで、その思いの切実さを際立たせ、リスナーの心を揺さぶっているのだ。

このような秋田の思いは、「生きる」と「笑う」が強い共起関係をもっているところからも伺える（8頁参照）。以下、3曲から一部歌詞を引用する。

虚しさに生きてその最中に笑えよ
さよならは一瞬だその最中に歌えよ（「花は誰かの死体に咲く」）

でもね僕はまだ嘘を隠してる 自分さえ騙す僕の嘘を
ほんとは笑って生きたいくせに 嘘をついてる 嘘をついてる（「バケモノ」）

僕らが願うのは 唯一つ 幸せになりたいって事
それがほしくて もがいて もがいて もがいて 奪って 奪って 奪って 奪って
それでも笑って生きていたいと健気に 海の風に微笑むあの娘は
愛する人が銃で撃たれたことを まだ知らない
どうかあの娘を救って（「カルマ」）

「生きる」と「笑う」の共起といっても、先にも述べたように、手放しに「笑って生きよう」と言っているわけではない。自分らしく笑って生きるのは難しいが、それでも、それを諦めないでいたい。諦めないでいてほしい。このような秋田の思いは、全体の調和と個人の尊厳がせめぎ合う現代を生きる人々や、世の中の不条理に曝されてどこか生きづらさを覚えている人々を、強く惹きつけるのではないだろうか。

加えて、「命」「歌う」「歌」が共起関係をもっていることに着目し、楽曲内における「命」と「歌」との関係性を探るため、「歌」「歌う」といった語彙の用いられ方を調べた。以下、3曲から一部歌詞を引用する。

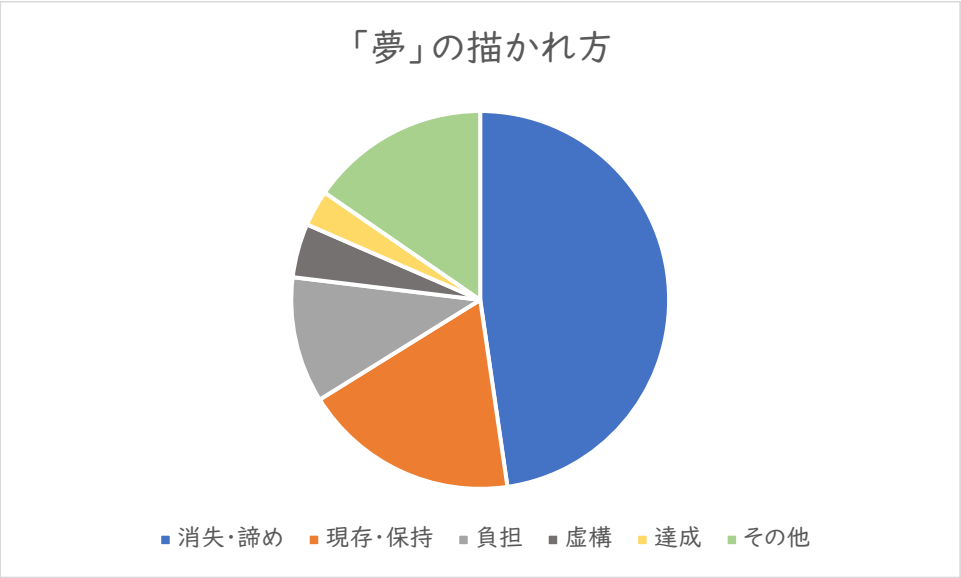
後悔も弱さも涙も　声高に叫べば歌になった　涙枯れぬ人らよ歌え（「リビングデッド」）

苦悩にまみれて　嘆き悲しみ　それでも途絶えぬ歌に　陽は射さずとも（「季節は次々死んでいく」）

悔し涙振りほどいて叫んだ歌　大事なものは二度と離さないよ
振り向くな後ろには花も咲かねぇ　人生は美しい（「ライフイズビューティフル」）

「**後悔**」や「**弱さ**」、「**涙**」を声高に叫んだものが歌であると表現されていることから分かるように、「歌う」ことはありのままの自分をさらけ出し、思いを叫ぶことであると捉えられている。「**苦悩にまみれて　嘆き悲しみ**」ながら、その苦悩や悲しみを拾い上げて声高に歌い、その先の希望を歌い続けることで、自分という存在を保とうとしているのだ。秋田にとって、歌うことは己の命を輝かせること、自分らしく生きていくことそのものであるとも言えよう。そのように自分の全てをかけて歌い続ける秋田の歌は、聴く者の心にまっすぐ届く。

歌い続ける、音楽を届け続けることは、バンド結成当初から秋田が必死で追い求めてきた「夢」でもある。その「夢」という語彙が「死ぬ」という一見相反するイメージの語彙と共起関係をもっていることに着目し、楽曲内において「夢」という語彙がどのような文脈上で使用されているのかを調べると、以下のような結果になった。なお、一つの楽曲内において全く同じフレーズの繰り返しに複数回使用されているものはまとめて一つとして集計している。



「夢」を見失ってしまった、諦めてしまった、奪われてしまったと歌うものが31曲で、全体の48%を占めていた。夢を追い続けることを描くものが12曲（18%）、夢を負担になるもの、重荷になるものとして歌うものが7曲（11%）、夢は現実味のない虚構であると歌うものが3曲（5%）、夢を成し遂げたと歌うものが2曲（3%）、その他が10曲（15%）であった。以下、描かれ方の種類ごとに歌詞の例を挙げる。

<消失・諦め>

泥酔にまかせて現実をずらかった 夢も消えちゃった 「今日の仕事も辛かった」（「しらふ」）

白紙のノート 置き去りの夢 行かないで 行かないで 蝉時雨（「美しき思い出」）

海岸に見果てぬ夢を看取り続けたら 夢だってとうとう見果てた（「ワードプロセッサー」）

あの時紅い夕焼け 戸惑う未来託して
誓った夢 理想も 今じゃガラクタみたいに 時の流れに 錆付いて（「この街で生きていく」）

報われない願いをくべろ 叶わなかった夢をくべろ
遂げられない恨みをくべろ 死にきれなかった夜をくべろ（「リビングデッド」）

<負担>

辛酸舐める日々の逆境 夢が重荷になってりゃ世話ねぇ（「逃避行」）

夢とか希望とか未来は 今の僕にとっては脅しだ（「風に流離い」）

昔は夢もあるにはあった その夢が枕元でほざく
「おまえじゃ駄目だこの役立たず 特別と思うなゴミ屑」（「風に流離い」）

夢は必ず叶うから って夢を叶えた人達が
臆面もなく歌うから 僕らの居場所はなくなった（「ヨクト」）

<虚構>

夢なんてもんは偶像だ それを崇める私、背徳者
願えば叶うよ 叶うよ 叶うよ うるせぇ背後霊 才能不在（「ポルノ映画の看板の下で」）

<現存・保持>

いつも見送る側 なんとか飛び乗った 身の程知らずの夢を生きている（「ひろ」）

夕立旅立ち 行く先に光 懐かしい夢達 未だに覚めないし（「夕立旅立ち」）

夢は夢だとうそぶいた 叶えてこその夢だと誰かが言った
夢を終えた奴らに耳を貸すな 君の夢なら 君が夢見ろ（「悲しみ一つも残さないで」）

<達成>

いつも見送る側 それでも追いかけた 諦めかけた夢を掴んだ（「ひろ」）

「夢」という語彙は、amazarashi の楽曲内では60%以上の割合でマイナスイメージを伴う文脈で用いられているということが分かった。これは秋田が、東京でミュージシャンを目指して活動する途中一度挫折して地元青森に帰った（その後青森で amazarashi としての活動をはじめた）という過去を持っていて[iv]、夢が潰える苦しみを知っているからであろう。「ヨクト」で歌われているように、現実世界で「**夢を叶えた人たち**」の側に属することはとても難しい。むやみに「夢」を美化する言葉に傷つく心理状態にある人間も一定数存在する。そのような人たちにとって、秋田の表現はよく馴染み、寄り添い、痛みを分かち合ってくれる存在となり得る。

このような歌詞は、「**叶わなかった夢**」「**置き去りの夢**」などの一部分のみを見ると「暗い」と捉えられることもあるだろうが、「生きる」という語彙の分析からも述べてきたように、秋田はマイナスの部分をリアルに描き、向き合ったうえで「それでも」希望を捨てないということを歌っている。そして描かれたマイナスの部分に強く共感する者であればあるほど、その希望を自分自身の現状と地続きの、追い求める未来と重ねて捉えることができ、そこに光を見出すことができる。そもそもマイナスの部分に共感せず、「考えすぎだ」「重い、暗い」などという感想を抱く者からすれば、その先に描かれる希望も大した意味を持たないのである。これが、「第一章　第三節　分析のねらいと予想される結論」で述べた、聴く者によって感じ方が異なるという特徴の原因となっているのではないだろうか。

続いて、構成分析の結果について考察する。

冒頭部と末尾の叙述の種類については、明らかな違いが見られた。冒頭部では「希望」の楽曲を除いて「状況」の記述・描写が最も多く、次いで「心理」や「状況＋心理」が目立った（13頁参照）。ここから、楽曲冒頭では物語における背景設定や場面化による歌詞世界への誘い込みを重視していることがわかる。以下、4曲から、冒頭部における「状況」の記述・描写の例を挙げる。

上空に群れをなして飛ぶカラス　陽が落ちても　今朝からの雪は止まず（「カラス」）

くそ暑い新宿のど真ん中でふいに眼球にしがみ付く映像（「おもろうてやがて悲しき東口」）

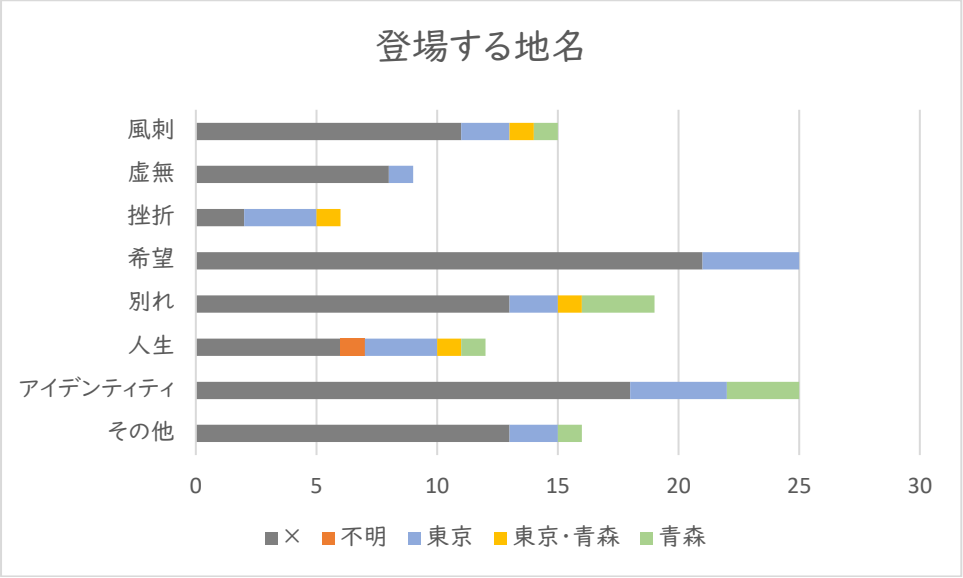
アイデンティティが東京湾に浮かんでいる
巡航する豪華客船のその波で　浮遊してる　やがて沈む（「抒情死」）

憂鬱が風に散らばり　吹きだまって影になる（「さよならごっこ」）

「カラス」では、「**上空に群れをなして飛ぶカラス**」というようにその風景を端的に描くことで聴く者の脳裏に鮮明な映像を浮かびあがらせたのち、「**陽が落ちても**」で時間帯を、「**今朝からの雪は止まず**」で天気と継続する時間の流れを示している。このように具体的な場面化が楽曲冒頭で為されていることによって、聴く者が歌詞世界に引き込まれやすくなっているといえる。

「おもろうてやがて悲しき東口」では、「**くそ暑い新宿のど真ん中で**」というように実在の地名と具体的な場所、その時の気温までが冒頭のワンフレーズで描かれており、それによってリスナーは一気にその空間に誘われる。そこに「**ふいに眼球にしがみ付く映像**」という活喩法を含む表現が続き、「**くそ暑い新宿のど真ん中**」で目にうつる「**映像**」を聴く者一人ひとりが自分なりに想像することができるようになっている。

「冒頭部」の状況記述・描写という内容からは少し外れるが、ここで楽曲全体を通しての amazarashi の場面化表現の特徴のひとつに触れておきたい。それは、「おもろうてやがて悲しき東口」における「**新宿**」、そして「抒情死」における「**東京湾**」のような、具体的な地名（駅名・路線名・道路名含む）を用いた表現である。これは本研究の対象楽曲127曲のうち35曲、つまり約28%の楽曲にみられ、その地名は基本的に青森県のものと東京都のものに分けられる。それは、秋田の出身地が青森県、挫折を経て地元青森に戻るまで音楽活動を続けていた場所が東京都であり、その二つの土地に思い入れがあるからであろう。それぞれの地名が楽曲内でどのような役割を果たしているのかを明らかにするため、その使用例をみていった。まず楽曲の主題ごとに歌詞に登場する地名を分類してグラフにまとめると、以下のようになった。



楽曲数に対する地名の使用頻度が最も高かったのは「挫折」の楽曲で、二番目は「人生」の楽曲であった。全体として使用頻度が高かったのは東京の地名であるが、「別れ」の楽曲に限っては青森の地名が優勢となった。

「挫折」の楽曲では、全6曲中4曲に東京の地名が出てきている。これは東京という場所が秋田に挫折を味わわせた場所であり、どこまでも冷たく厳しいイメージを持たせる場所だからであろう。具体的な東京の地名を出すことで、よりリアルに当時の厳しい状況を描き出しているのである。「希望」の楽曲では4曲に東京の地名が使用されていたが、これらは全て希望を歌う前の段階の、苦悩の時期を描く際に用いられていた。他の主題においても、東京の地名は主に現実の冷徹さや、味わった苦悩を描く際に用いられていた。以下、6曲から一部歌詞を引用する。

言いたい事言わぬ癖に　分かってほしいだなんて
無視されたって当たり前　東京に取り残されて（マスクチルドレン）

酷く疲れた幾つもの顔が　車窓に並ぶ東横線の高架
僕はと言えば幸か不幸か　道外れた平日の落伍者（雨男）

時々虚しくなって全部消えてしまえばいいと思うんだ
神様なんてとうの昔に阿佐ヶ谷のボロアパートで首吊った（「光、再考」）

埃だらけの作業服 冷たい視線 山手線 特に原宿より南は痛てえ（「しらふ」）

遮断機に置き去りの自意識 真っ二つに割れる数秒前
赤が光る 消える 光る 消える 光る 消える 消えろ
チャイナドレスの女 田園都市線 劣等 劣等 過去 過去
全部消えろ 神様 殺してやる（「ムカデ」）

溜め息に似た自覚無き悪意が ファストフードの油の匂いみたいに飽和している東京（「メーデーメーデー」）

一方青森の地名は、懐かしい場所、美しい記憶の象徴として用いられる頻度が高かった。しかしその思い出との決別や、別れの悲しみ、変わってしまうことの寂しさなどが中心的に描かれることもあった。このようなところが、「別れ」の楽曲で優勢となった理由であろう。以下、5曲から一部歌詞を引用する。

金も生活もどうでもいいよ 綺麗なものだけ見させてくれよ
ライブ帰り浅虫の黄昏 そういう景色をもっと見たいよ（「後期衝動」）

あれから僕ら幾星霜 始まりが遠くに霞む
国道の朝焼け 浅虫の黄昏 辛い事 泣いた事 笑った事（「それはまた別のお話」）

青森駅前に雪が降る 果たせなかったいつかの約束が
バス停に留まる少女が吐いた 白い息と一緒に夜空に消えた（「初雪」）

六つ 移ろう人も街も むつ市の海辺、過去が映る
無痛でいられぬ人の世に ここだけは嵐もくつろぐ（「数え歌」）

旅ゆく人は荷物も少なく 望郷、忘れ難き思い出も
始発駅に全部置いてくるから 青森駅は感傷だらけ（「悲しみ一つも残さないで」）

以上のように、東京や青森の具体的な地名にイメージや意味をもたせて歌詞の中に取り入れることで、その風景に現実味をもたせるとともに、状況や空気感をイメージしやすくしているのだ。この要素は、amazarashi の状況記述や描写、場面化表現の一端を確かに担っているといえるだろう。

さて、「冒頭部」の状況記述・描写の内容に戻るが、先に引用した「抒情死」や「さよならごっこ」の冒頭部では、「**アイデンティティ**」という概念や「**憂鬱**」という心理が、眼前の風景の中に埋め込まれた表現が用いられている。「抒情死」でいえば、「**アイデンティティ**」が「**東京湾**」で「**豪華客船**」の波にゆられて浮き沈みしていると描かれているが、「**豪華客船**」は「**アイデンティティ**」を脅かす世間・大衆のメタファーであり、その波に揺られて沈む「**アイデンティティ**」の描写が、個への抑圧・同調圧力などを表しているのではないかと考察できる。「**さよならごっこ**」では、「**憂鬱が風に散らばり**」というところで枯れ葉が風に吹かれて散らばっているようなもの悲しい風景が連想され、

「**吹きだまって影になる**」と続くことで、風に吹かれるその「**憂鬱**」が晴れることなく心の隅に積もっていくような感じが受け取れる。このような心理の埋め込みを伴う風景の描写は、その場面を取り巻く空気や雰囲気をよりリアルに演出するとともに、リスナーにその場面がもつ意味を考えさせることに繋がっているといえるだろう。

末尾では、「人生」「虚無」「風刺」の楽曲を除いて「心理」の記述・描写が最も多く、次いで「状況」や「状況＋心理」が続いていた（14頁参照）。以下、6曲から、末尾における「心理」の記述・描写の例を挙げる。

孤独になれない僕らの弱さ　心に飾って一人歩む（「おもろうてやがて悲しき東口」）

理想叶える為犠牲になってくれ　最低な幕開け　この始まりを照らしてくれ（「マスクチルドレン」）

痛みの雨の中　ずぶ濡れでも笑ってよ　ここが僕らの世界　ルラルラルラ（「ドブネズミ」）

あの人が愛した　父さんが愛した　この海になれたら　抱きしめてくれるかな
今でもずっと愛してる（「自虐家のアリー」）

急いで買いに行かなきゃ　誰よりも多く買わなきゃ
奪ってでも手に入れなきゃ　愛を買わなくちゃ（「ラブソング」）

あなたがくれたその全てに　ありがとうって聞こえますか（「隅田川」）

末尾に心理をはっきりと置くことで、楽曲内で言いたかったこと、伝えたかったことをはっきりさせ、聴く者の心理に強くはたらきかける効果が生まれている。「人生」「虚無」「風刺」の楽曲においては作詞者の心理を主張しすぎず、状況の記述や描写を並べてリスナーの解釈に委ねている部分が大きい。それぞれに異なる背景をもつリスナー一人ひとりが、その楽曲についてどのような感想・考えをもつのか。聴く者によって捉え方が変わるというのも、魅力の一つであろう。

冒頭部と末尾の叙述の種類について分析していると、冒頭部と末尾とで印象が大きく変わる楽曲の存在に気が付いた。例えば、以下のような楽曲である。

バイトの面接ばっくれて　雨雲眺めて不貞寝さ
ビールの空き缶で膨れた　ゴミ袋で夢も潰れた（「もう一度」冒頭部）

もう一度　もう一度　あの日離れていった希望に
ざまぁみろって言ってやる為に　何度も立ち上がるんだ　もう一度（「もう一度」末尾）

これは、「もう一度」という楽曲の冒頭部と末尾の歌詞である。冒頭部に描かれているのは、投げやりな態度と荒んだ生活。「**ビールの空き缶で膨れた　ゴミ袋で夢も潰れた**」とあるが、このような飲酒を想起させるフレーズは

本研究の対象楽曲127曲のうち18曲、約14%の楽曲にみられ、主に現実逃避をするさま、まともな心理状態でないさま、嫌なことを我慢して飲み込むさまを描く際に用いられる。そのような表現を冒頭部に用いることで、「**僕**」の投げやりで荒んだ状態をより生々しく描いているといえる。

一方末尾に描かれているのは「**何度も立ち上がるんだ**」という前向きな意志であり、冒頭部で描かれた心理から大きな変化が生じていることは明らかだ。このような、冒頭部と末尾において描かれる心理の違いに着目し、それぞれの内容を「プラス」や「マイナス」、「フラット」などに整理して集計しグラフ化したものが、「第二章　第二節　構成分析　〇冒頭部の心理と末尾の心理」に示したものである（15・16頁参照）。冒頭部では全体として「マイナス」の青色が目立ち、末尾では「風刺」「虚無」「挫折」の楽曲では依然として「マイナス」、それ以外の楽曲においては「プラス」の橙色が目立つようになっている。

先程紹介した「もう一度」という楽曲では、冒頭部は「マイナス」、末尾は「プラス」となっている。そしてその相反するイメージを抱かせる両者を繋ぐのは、末尾にある「**あの日離れていった希望**」という言葉である。冒頭部で描かれていたのは、末尾で言及されている「**希望**」が「**離れていった**」「**あの日**」だったのだ。夢も潰れて投げやりになっていた主人公が「**何度も立ち上がるんだ**」と覚悟を決めるに至るまでに一体何があって、どのような心理変化があったのかが、楽曲内では細かく描き出されている。その推移の様子を明らかにするため、「1番Aメロ」「1番Bメロ」「1番サビ」「2番 A メロ」「2番 B メロ」「2番サビ」「C メロ」「L サビ」の各部分の内容について分析した。以下、「もう一度」の全歌詞を引用し、その後解説を加えていく。

バイトの面接ばっくれて　雨雲眺めて不貞寝さ　ビールの空き缶で膨れた　ゴミ袋で夢も潰れた
どっかで諦めていて　無表情に生きている　あまりに空っぽすぎて　途方に暮れちまうな
彼女が帰って来るまでに　言い訳を急いで思案する　何やってんだってしらけて　どうでもいいやって居直る
そうだこの感じ　今まで何度もあった　大事なところで僕は　何度も逃げ出したんだ（1A メロ）

昨日から雨は止まない　このままでは終わらない　敗北　挫折　絶望がラスボスじゃねえ
自分自身にずっと負けてきた　勝てない訳ないよ自分なら　僕が一番分かってる　僕の弱さなら（1B メロ）

もう一度　もう一度　駄目な僕が　駄目な魂を　駄目なりに燃やして描く未来が　本当に駄目な訳ないよ
もう一度　もう一度　僕等を脅かした昨日に　ふざけんなって文句言う為に　僕は立ち上がるんだ　もう一度
（1 サビ）

ここには希望も救いもない　分かってんならどっか行けよ　「昔は良かったな」なんて　そりゃ白旗を振るって事
どっかで陰が落ちれば　どっかに光は射すもの　どこに立っているか位で　不幸せとは決まらねえ（2A メロ）

昨日から雨は止まない　でも傘なんて持ってない　悲痛　現実　僕らいつも雨曝しで
って言う諦めの果てで　「それでも」って僕等言わなくちゃ　遠くで戦っている　友よ挫けるな（2B メロ）

もう一度　もう一度　馬鹿な僕らが　馬鹿な希望を　馬鹿にされてこぼしたあの涙が　無駄だった訳ではないよ
もう一度　もう一度　僕等を笑ったこの世界に　ふざけんなって借りを返す為に　僕は立ち上がるんだ　もう一度
（2サビ）

静かな部屋の中　雨音だけが響いている　どこにも行けないのか　どこにも行かないのか
夢　希望　傷だらけで笑いあう友達　あの子の笑顔　全部ないよ　始まりはいつも空っぽ（C メロ）

もう一度　もう一度　押しつぶされる度つぶやいて　ようやくたどり着いたこの場所に　正しさなんていらないよ
もう一度　もう一度　あの日離れていった希望に
ざまぁみろって言ってやる為に　何度も立ち上がるんだ　もう一度（L サビ）
（「もう一度」/amazarashi　作詞・作曲：秋田ひろむ　収録作品：『夕日信仰ヒガシズム』 2014年）

1A メロでは、先にも述べたように主人公の投げやりな態度と荒んだ生活が描かれている。バイトの面接に行かなかったことの言い訳を思案するという具体的な心理・行動が描かれていることで、現状と向き合わず誤魔化しながら生きている「**僕**」の様子がありありと伝わるようになっている。「**彼女が帰って来るまでに**」という表現によって、外出して帰ってくる、つまり正常な社会生活を送っている彼女と「**空っぽ**」な「**僕**」との対比が為されている。その後に描かれている「**大事なところで僕は何度も逃げ出したんだ**」という気づきから、「**僕**」の心が動き始める。

1B メロでは、「**昨日から雨は止まない**」という苦悩の最中にいる心理状態の暗喩の後に「**このままでは終わらない**」という前向きな心理描写が置かれる。「**敗北　挫折　絶望**」で終わるのではなく、その弱い自分自身と向き合って自分自身に勝つのだという決意をもって、続くサビへと繋がれる。

1サビでは、「**駄目な僕が駄目な魂を駄目なりに燃やして描く未来**」というように「**駄目な**」を繰り返して強調した「**未来**」を、「**本当に駄目な訳ないよ**」と肯定している。「**駄目な僕**」であることを認め受け入れたうえで、その「**僕**」が描く未来を信じようとしているのである。「**僕等を脅かした昨日**」とは苦悩してきた日々のことで、それに「**ふざけんなって文句言う為に**」、つまり反撃を試みるために、「**もう一度**」立ち上がるのだと決意を固めている。

2Aメロでは、「**ここには希望も救いもない**」というマイナスの現状認識の後に、「**分かってんならどっか行けよ**」とその現状から脱却するために動き出すことを促す言葉が続けられる。「**昔は良かったな**」などと過去に甘んじることを否定し、自分の現在の立ち位置だけで幸不幸は決まらない、そこからどう動き出すかが重要なのであるという前向きなメッセージが投げかけられる。

2Bメロでは、1Bメロと同様の「**昨日から雨は止まない**」というフレーズの後に、「**でも傘なんて持ってない**」という、降り注ぐ苦悩から身を守る術を持っていないということを示す表現が置かれる。「**悲痛　現実　僕等いつも雨曝しで　っていう諦めの果てで　『それでも』って僕等言わなくちゃ**」は、「序章　研究動機・目的」で述べた「amazarashi」というバンド名の由来そのままの意味が込められたフレーズであり、秋田の信念が表れているとともに、この楽曲においても核となる心理描写であるといえる。

2サビでは、「**馬鹿な僕らが馬鹿な希望を馬鹿にされてこぼしたあの涙が無駄だった訳でない**」というように、大それた夢をみて希望を抱き、世間からは馬鹿にされて悔しい思いをしてきた自分たちをそのまま肯定している。その当時「**僕等**」を笑った世間に「**借りを返す**」には、その大それた夢をつかむしかない。そのために、過去の涙を糧にして「**僕は立ち上がる**」という決意が描かれている。

Cメロでは、まず「**静かな部屋の中　雨音だけが響いている**」といった状況描写が為され、その空間にリスナーを誘っている。そして「**どこにも行けないのか　どこにも行かないのか**」というリスナーそれぞれに自分自身と向き合い現状について考えることを促すような問いが発せられたのち、「**夢　希望　傷だらけで笑いあう友達　あの子の笑顔全部ないよ**」「**始まりはいつも空っぽ**」というように、全てを失った孤独への恐れと共にまっさらなスタートへの覚悟をも感じさせるような現状認識が置かれている。

L サビでは、その覚悟の末にたどり着いた現在が「**もう一度　もう一度　押しつぶされる度つぶやいて　ようやくたどり着いたこの場所**」と歌われ、これまでのサビで繰り返し歌われてきた「**もう一度**」という言葉が、「**僕**」が現実に打ちのめされ絶望に押しつぶされる度、絞り出すようにして唱え続けてきた言葉なのだということを再確認している。苦しみの中で「**もう一度**」を繰り返したどり着いたその場所に「**正しさなんていらない**」という言葉からは、世間が決める正しさなどではなく自分自身の軌跡と強い思いを信じるのだという意志が読み取れる。「**あの日離れていった希望**」に「**ざまぁみろ**」と言ってやるために、つまり苦悩に塗れた日々を見返すために、これから先も「**何度も立ち上がる**」のだという決意で、全体が締めくくられている。

このようにして、他の楽曲についても部分ごとに描かれている状況や心理の内容を分析し、それらをプラスやマイナスなどに分類して集計しグラフ化したものが、「第二章　第二節　構成分析　〇各部分に描かれている状況や心理」に示したものである（17～19頁参照）。この「もう一度」という楽曲で言えば、1A メロは状況と心理共にマイナス（**夢も潰れた・無表情に生きている**）であるため「マイナス」。1B メロは、状況はマイナスであるが心理は上を向いている（**昨日から雨は止まない・勝てない訳ないよ自分なら**）ので「マイナスプラス」。1サビは、前向きな心理と状況回復が描かれている（**僕等を脅かした昨日にふざけんなって文句言う為に何度も立ち上がるんだ**）ため「プラス」。2A メロは、状況はマイナスで心理が上を向いている（**ここには希望も救いもない・どこに立っているか位で不幸せとは決まらねえ**）ので「マイナスプラス」。2B メロも同様（**僕等いつも雨曝しで・それでもって僕等言わなくちゃ**）なので「マイナスプラス」。2サビは、1サビと同様に前向きな心理と状況回復が描かれている（**僕等を笑ったこの世界にふざけんなって借りを返す為に僕は立ち上がるんだ**）ため「プラス」。C メロは室内の状況描写と現状確認のみで構成されているので「フラット」。L サビも1・2番のサビと同様に前向きな心理と状況回復が描かれている（**ようやくたどり着いたこの場所・あの日離れていった希望にざまぁみろって言ってやる為に何度も立ち上がるんだ**）ため「プラス」、という具合である。

主題ごとにグラフを細かくみてみると、「希望」「人生」「アイデンティティ」の楽曲からは、この「もう一度」という楽曲と同様に A メロから L サビにかけて「プラス」や「マイナスプラス」の占める割合が増していく傾向がみてとれる。はじめにマイナスの状況や心理をはっきりと描くことで、そこから再度立ち上がり、希望を見出したり自分を肯定したりしていく様子を引き立たせているといえるだろう。「挫折」や「虚無」の楽曲では一貫して「マイナス」が大部分を占め、「風刺」の楽曲では一貫して淡々と状況記述・描写を並べる「フラット」の割合が半数以上を占めている。「別れ」の楽曲では C メロまでは一貫して「フラット」が半数以上を占めているが、L サビでは「プラス」「マイナス」「マイナスプラス」が半数以上となっている。淡々とした語りを経て最後に心の動きがみられることによって、抑えきれない感情があふれ出す様子が演出され、ドラマ性が増し、切実さや思いの強さが強調されているといえる。

ここから更に心理に着目して楽曲の構成パターンの分類を具体化するため、一曲を通しての視点人物の心理・意識の様子を具体的な内容に即してパターン化し、主題ごとに分類してまとめた。以下、例にとって説明するため「マスクチルドレン」の全歌詞を引用する。

この世界は少し煩すぎるから カーテンを全部閉め切ったよ
結露した窓を擦って覗くように 恐る恐る世界を窺ってた
忙しい日々がやがて土砂となり それに憧れは埋没して
気付いた時には もうすでに手遅れで 息もできぬまま数年が経ってた(ⅠA メロ)

諦めの萌え木 レジスターの奴隷 心が腐らないように 冷凍する必要があった
弁当をレンジで温めながら 心溶かしてくれ 心溶かしてくれ（ⅠB メロ）

表情すら隠す癖に 分かってほしいだなんて 後ろめたくて当たり前 夜勤明け光る朝焼け
こんな一日の終わりに不釣り合い まだ何も成してない 僕の今日を照らさないで（Ⅰサビ）

頭ん中が少し煩すぎるから 喜怒哀楽を全部殺したよ
うざい客の怒鳴り声も遠く響く その分ビールの本数も増えたけれど
飲み屋で同級生の自慢話には 相槌打って愛想よく
くだらねえと唾を吐く心の声に 一番くだらないのは僕だと青ざめる（2A メロ）

昔描いてた 将来や夢は 最低賃金で売り払った
こっから歩む一歩の価値も たかが知れてる どうせ底値なら 心躍る方へ せめて望む方へ（2B メロ）

言いたい事言わぬ癖に 分かってほしいだなんて 無視されたって当たり前 東京に取り残されて
僕が居なくたって回ってく世界 まだどこにも行けない 僕の今日を無視しないで（2サビ）

僕は今日もマスクをして家を出る 口煩い東京から身を隠す為
言えない事を言わなかった事にする為 やれない事をやらなかった事にする為
そしたら僕の声も失くしてた 自分にさえ本音隠すようになってた(C メロ)

本当は飛び出したい癖に 僕なんかじゃ無理だなんて
「そんなことはないよ」だって 誰も言ってくれるわけねえ
そんな一日を幾つ殺して 僕は今最低に立ってる 僕の始まりには似合ってる
居ても立っても居られずに 家とは逆の方向へ 後ろめたささえ晴々 同じようで違う朝焼け
理想叶える為犠牲になってくれ 最低な幕開け この始まりを照らしてくれ(L サビ)
（「マスクチルドレン」/amazarashi 作詞・作曲：秋田ひろむ 収録作品：『ボイコット』 2020年）

ⅠA メロは、前半2行は比喩表現、後半2行は直接表現が用いられている。前半では「**この世界は少し煩すぎる**」

という状況と「**カーテンを全部閉め切った**」という行動から、「**僕**」が煩い世間に対して心を閉ざしている様子が描かれており、「**結露した窓を擦って覗くように**」自分の殻の中から世間の様子を窺う様子が描かれている。「**忙しい日々**」に「**憧れは埋没**」し、「**息もできぬ**」ような日々を送っているということは、現実に追われることによって夢を追い求めることができなくなっているということであり、追いつめられた「**僕**」の荒んだ心が表されている。

ＩB メロは、「**諦めの萌え木**」という言葉から諦めの芽生え、「**レジスターの奴隷**」「**弁当をレンジで温めながら**」などの言葉からコンビニエンスストアなどでレジ打ちの仕事をしていることがうかがえるようになっており、「**僕**」がＩAメロで言及された「**憧れ**」とは程遠い現実を生きている様が具体的に描かれている。「**心が腐らないように冷凍する必要があった**」とは、これ以上心が傷つかないように本当の気持ちを封じ込めなければならなかったということであろう。その後に「**心溶かしてくれ**」というフレーズが二度繰り返されることによって、本当は諦めたくないともがく「**僕**」の葛藤が読み取れるようになっている。

Ｉサビでは、コンビニエンスストアでの夜勤明けに見る朝焼けと、その時の心理が描かれている。「**後ろめたくて当たり前**」、「**まだ何も成してない　僕の今日を照らさないで**」というフレーズからは、「**憧れ**」が埋没した殺風景な毎日を淡々と生きている自分自身に対するやりきれない思いが読み取れる。「**朝焼け**」という光を帯びた美しい風景と、「**照らさないで**」という消極的で後ろ向きな心理の対比によって、そのやりきれなさはより際だっているといえるだろう。

2A メロ冒頭では、「**頭ん中が少し煩すぎるから　喜怒哀楽を全部殺したよ**」と、葛藤する自分自身の心を殺して見ないふりをしようとする、ＩB メロで言うところの「**心が腐らないように冷凍する**」様子がストレートに描かれている。「**うざい客の怒鳴り声**」が「**遠く響く**」のは、敏感で傷つきやすい心を殺すことによって自分を守ったからである。そうせざるを得ないほどに心が疲弊してしまっていた「**僕**」は、酒に頼って嫌なことを忘れようとする。「**同級生の自慢話**」に愛想よく相槌をうつ上辺の様子と「**くだらねえと唾を吐く心の声**」との対比は、妬みや嫉みに支配された余裕のない「**僕**」の心を描き出し、その後の「**一番くだらないのは僕だ**」という恐ろしい気づきの場面によって、目を背けていたかった現実、醜い自分自身に直面した苦しみや痛みが演出されている。

2Bメロ冒頭の「**昔描いてた将来や夢は　最低賃金で売り払った**」という表現は、思い描いていた「**憧れ**」を、その日その日をなんとか生きていくための労働、その報酬と引き換えに手放してしまったということを表している。「**こっから歩む一歩の価値もたかが知れてる**」というフレーズは一見自虐的で後ろ向きな心理を感じさせるが、それに続く「**どうせ底値なら　心躍る方へ　せめて望む方へ**」というフレーズによって、その「**たかが知れてる**」「**一歩**」が肯定される。

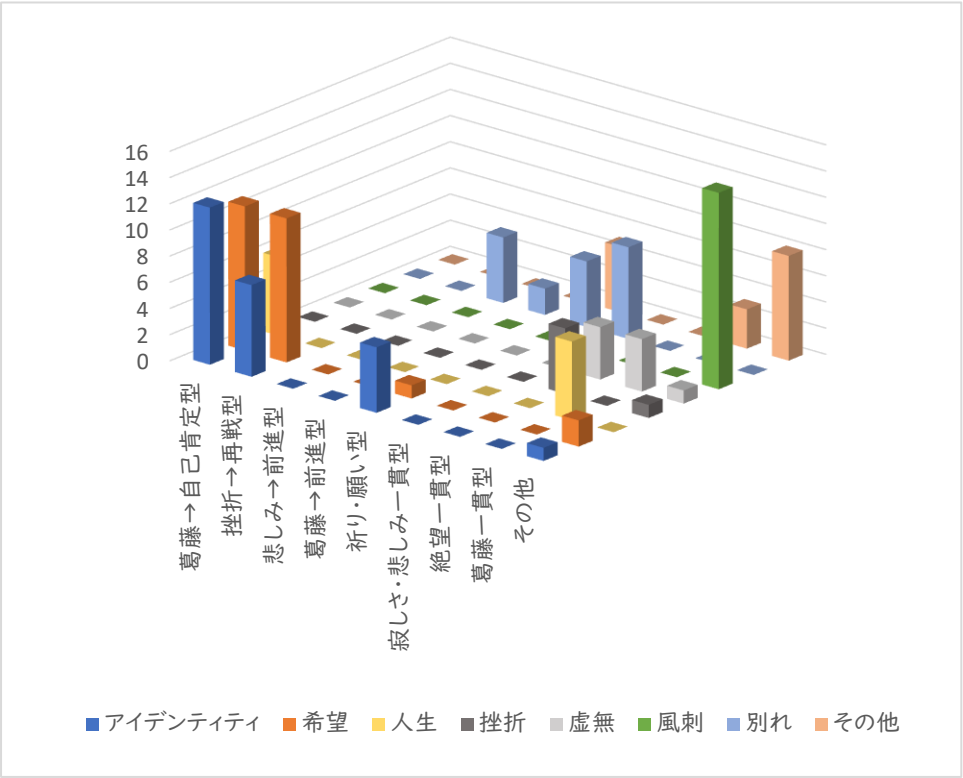
2サビでは、「**無視されたって当たり前**」「**僕が居なくたって回ってく世界**」「**まだどこにも行けない**」などの自虐的な心理や葛藤の様子が描かれているが、最後は「**僕の今日を無視しないで**」という願いで結ばれている。Ｉサビでは「**まだ何も成してない僕の今日**」が否定的に捉えられ、「**照らさないで**」という後ろ向きな心理が描かれていたが、2サビでは「**まだどこにも行けない僕の今日**」の存在を認め、肯定しようとする表現が用いられているのだ。2Bメロの「**どうせ底値なら　心躍る方へ　せめて望む方へ**」、そして2サビの「**僕の今日を無視しないで**」は、この楽曲における重要な心理の切り替え部分であるといえる。

Cメロでは「**言えない事を言わなかった事にする為**」「**やれない事をやらなかった事にする為**」というように、傷つきたくないが故に自分で自分を誤魔化してきたことを再認識する様子が描かれ、「**そしたら僕の声も失くしてた　自分にさえ本音隠すようになってた**」と、自分という存在を失くしてしまっていたことへの気づきが描かれている。

Lサビでは、本当はしたいこと、言いたいことがあるのにそれを誤魔化してきた日々を振り返り、「**そんな一日を幾つ殺して　僕は今最低に立ってる**」と自分の現状を自虐的に捉えている。そしてその後に「**僕の始まりには似合ってる**」と続けることで、その「**最低**」な「**今**」を肯定している。「**居ても立っても居られずに　家とは逆の方向へ**」はそれまで甘んじていた現状から抜け出す様子を表し、続く「**後ろめたささえ晴々　同じようで違う朝焼け**」というフレーズは、Iサビの「**後ろめたくて当たり前**」「**夜勤明け光る朝焼け**」を想起させ対比させる効果をもつ。過去に感じていた「**後ろめたさ**」は「**晴々**」としたものになり、その時見上げる「**朝焼け**」は過去のものとは違って見えた。「**理想叶える為犠牲になってくれ　最低な幕開け　この始まりを照らしてくれ**」という最後のフレーズは、Iサビの「**僕の今日を照らさないで**」というフレーズと明確に対比され、傷つき、苦悩しながら紛れもない自分自身を生きていくのだという強い覚悟を表している。

以上が、「マスクチルドレン」を例にとった楽曲内における心理の変化とその表現方法についての説明である。「マスクチルドレン」では楽曲前半部に諦めや挫折が描かれ、後半部にはそれらを乗り越えて意識を新たにし、再度立ち上がる様子が描かれていた。このような推移パターンを、その特徴から「挫折→再戦型」と名付けた。

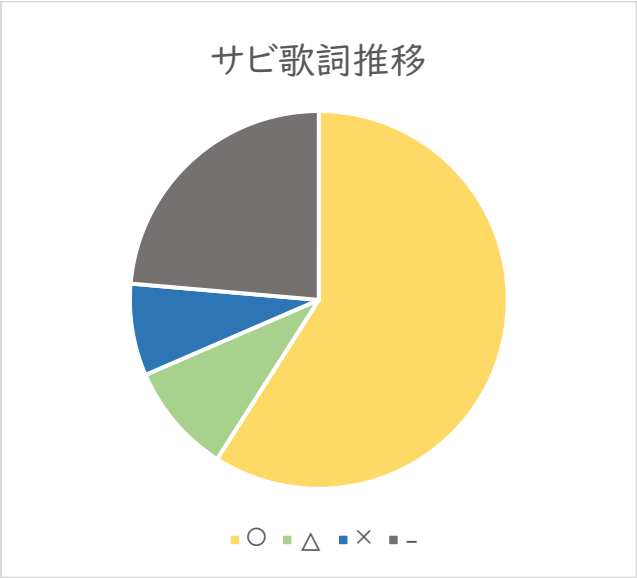
他の楽曲についても同様に推移をパターン化してラベリングした結果、「挫折→再戦型」のほかに、「葛藤→自己肯定型」、「悲しみ→前進型」、「葛藤→前進型」などの推移パターン、そして「祈り・願い型」、「絶望一貫型」などのように心理の方向性が一貫しているものなどに分類することができた。以下、心理・意識の推移パターンを主題ごとに集計し整理したグラフを示す。



「アイデンティティ」と「希望」の楽曲では、先述したようにマイナスからプラスへと推移していく「葛藤→自己肯定型」と「挫折→再戦型」が大部分を占めていた。「人生」の楽曲では、「葛藤→自己肯定型」に加えて人生について考え葛藤し続ける様子が描かれている「葛藤一貫型」もみられた。「挫折」の楽曲では基本的に絶望が一貫して描かれており、「虚無」の楽曲では現状を憂えた葛藤と絶望とが描かれていた。「風刺」の楽曲では、全体を通して皮肉を織り交ぜながら世間の状況や風潮が描かれており、他の主題と共に心理の推移パターンを分類することが困難であったため、全ての楽曲のパターンを「その他」とした。「別れ」の楽曲も特殊で、他の主題の楽曲とは異なり「悲しみ」や「寂しさ」が軸となって推移していくものとなっていた。

マイナスからプラスへと推移する「葛藤→自己肯定型」や「挫折→再戦型」、「葛藤→前進型」は、苦悩や葛藤を抱える者に寄り添いながらその未来を照らすように力強く響き、マイナスのまま進んでいく「絶望一貫型」や「葛藤一貫型」「寂しさ・悲しみ一貫型」は、自分が現在抱えている痛みと向き合わせてくれ、傷つき苦悩する自分自身を認めて受け入れるための一助になってくれると考えられる。「祈り・願い型」では、平和と安息を願う気持ちや大切な人に幸せでいてほしいと祈るような気持ちなどが描かれているが、それらは全て自分や相手が深い悲しみや苦しみを味わってきたからこその切実な祈りや願いであり、どこかせつなさを感じさせる描かれ方となっている。「悲しみ→前進型」では悲しみを振り切って前に進もうとする気持ちが描かれていたが、それは前向きな気持ちへの変化だけを描いたものではなく、「必死で振り切ろうとしなければ前に進めない」のだということを描くことで元々の「悲しみ」を強調し、切実さを増すものともなっていた。

先程例に挙げた「もう一度」と「マスクチルドレン」という楽曲では、A メロや B メロの歌詞はもちろん、サビ部分の歌詞も1番・2番・ラストで変化している。以下は、amazarashi の楽曲におけるサビ部分の歌詞推移の有無をグラフにまとめたものである。



○は1サビ・2サビ・L サビ全ての歌詞が異なっているもの（75曲/59%）、△は L サビだけが変化しているもの（12曲/9%）、×は変化がないもの（10曲/8%）、–はサビと判断できる部分が存在しないもの（30曲/24%）である。amazarashi の楽曲では、サビ部分に変化のある楽曲の割合が7割以上を占めていることが分かった。以下、「風に流離い」の1番サビ、2番サビ、L サビの歌詞を引用する。

夢なんて無い 期待してない 無気力のまるで生きてる死体
だけどわずかに 忸怩たる思い 生きてるプライドは捨てきれない
遅い夜中に 不意に泣いたり 行ったり来たりのギリギリのサイン
月が夜空に 余裕で浮かび 早く朝よ来いと願うばかり（「風に流離い」1番サビ）

夢なんて無い 期待してない 無気力のまるで生きてる死体
必死な奴に 後ろ指差し 嘲笑った奴を見返したい
ってのは建前 認められたい が目的のしがない唄うたい
勝ちなんてない 負けなんてない 死ぬまで続く無様な戦い（「風に流離い」2番サビ）

夢なんて無い 期待してない 無気力のまるで生きてる死体
だけど確かに 抗う歌に わずかながら空の光は射し
生きる力に 自ずと変わり 死に切れぬ僕の弁明と成り
風に流離い 理解し難い と言われても他に道など無い（「風に流離い」Lサビ）

「**夢なんて無い 期待してない 無気力のまるで生きてる死体**」というフレーズは固定し、それに続く部分を1番・2番・ラストで変えている。「**無気力のまるで生きてる死体**」だった「**僕**」は、「**生きてるプライド**」を捨てきれず、ギリギリで踏みとどまっていた。「**月が夜空に余裕で浮かび 早く朝よ来いと願うばかり**」という部分からは、「**僕**」の余裕の無さと苦しみが伺える。そんな「**僕**」は、「**認められたい**」という思いひとつで「**死ぬまで続く無様な戦い**」に挑み続けた。その過程で味わった苦悩と喜びが「**生きる力に自ずと変わり**」、「**死にきれぬ僕の弁明と成**」った。最後には、「**他に道など無い**」と腹を括って、この先も自分の人生と向き合っていくと覚悟を決めている。「**死にきれなかった**」ことが「**生きる力**」に変わることを描いている楽曲は他にもある。以下、「逃避行」の歌詞を引用する。

たまらずに人ごみを走った 今思えばあれが始まりだ
押しつぶされた僕の逃避行 上手く行かなけりゃ死んでやるぜ
「死に損なった」って言うより 「生き損なった」ってのが正しい
そんな僕らの長い旅が たった今始まったばかりだ（「逃避行」1番サビ）

銃弾の雨を掻い潜った これが僕の選んだ戦場
夢や時給や社会体の 奴隷になってる暇はないぜ
「生きながらえた」って言うより 「生かされてる」って方が正しい
そんな僕らの長い旅は 決して孤独なんかじゃなかった（「逃避行」2番サビ）

たまらずに人ごみを走った あの日のスピードで生きたいな
掴み取るその理想の重さ 僕らの悔し涙と等価
死に場所を探す逃避行が その実 生きる場所に変わった
そんな僕らの長い旅の 先はまだまだ遠いみたいだ（「逃避行」Lサビ）

世間からの抑圧に「**押しつぶされた**」、自分自身を「**生き損なった**」「**僕**」は、「**逃避行**」に踏み切る。「**銃弾の雨を掻い潜**」るように過酷な「**長い旅**」を経て、「**僕**」は「**掴み取るその理想の重さ**」を「**僕らの悔し涙と等価**」と評価する。理想にたどり着くために「**悔し涙**」は必要な対価であり、それを支払った者に「**理想**」が訪れるというのだ。それはその旅程における苦悩を肯定するものであり、このような表現はリスナー一人ひとりの「**悔し涙**」をも肯定する。苦しみや悲しみを、順を追って描き、それらを最後に肯定することで、聴く者の感情移入を誘うのだ。

歌謡曲における「サビ」は、「他より協調された聞かせどころの部分」（新村出 編『広辞苑』第六版 岩波書店 2008年 より）であり、その楽曲を強く印象付ける役目を担う部分であるといえる。そのサビ部分の歌詞内容は、聴く者が楽曲に対して抱く印象を大きく左右する。一曲を通して語られる心理推移の大筋が1番・2番・ラストのサビの歌詞推移にはっきりと表れていることで、聴く者はその楽曲のストーリーをつかみやすくなり、共感したり、感情移入したりしやすくなっているといえるだろう。

以上に挙げた例はサビ全体の歌詞が大きく変化しているものであるが、狭い範囲、一部分のみが変化しているものもある。以下、「星々の葬列」の歌詞を引用する。

笑って 笑って 天の川は星々の葬列
宇宙のパレード 宇宙のパレード さぞかし大きな星が死んだのでしょう（「星々の葬列」1番サビ）

笑って 笑って 天の川は星々の葬列
宇宙のパレード 宇宙のパレード さぞかし綺麗な星が死んだのでしょう（「星々の葬列」2番サビ）

笑って 笑って 天の川は星々の葬列
宇宙のパレード 宇宙のパレードさぞかし大事な星が死んだのでしょう（「星々の葬列」L 番サビ）

短くシンプルなサビ部分で、変化する範囲も極めて狭いが、「**大きな**」「**綺麗な**」「**大事な**」と確かに変化している。これらは「**星々の葬列**」、盛大な「**パレード**」が行われている理由について言及している部分の記述で、「**大きな**」は相対的・客観的な評価であり、「**綺麗な**」は絶対的・主観的な評価であるといえる。

しかしこの両者はどちらも外部から加えられる価値判断の要素が大部分を占める。大きくて綺麗な星は価値が高い、故に盛大なパレードが行われるであろう、という価値判断である。

それに対して「**大事な**」は、その「**葬列**」を担う者たちの完全な主観的価値判断であり、外部からの評価は全く無関係だ。その星は小さくいびつだったかもしれないし、明るい光を放つこともなかったかもしれないが、そのような価値判断は関係なく、星々にとって「**大事**」だったから葬列が行われたということだ。「**大きな**」「**綺麗な**」のふたつと「**大事な**」との違いは大きく、このように推移させることで、立派で美しいことが価値の全てではない、もしくは価値など無かったとしても大切な存在なのだということが伝えられている。

このように限られた部分のみが変化する楽曲の例としてもう一曲、「ナモナキヒト」を紹介する。以下、歌詞を引用する。

名も無き僕 名も無き君 何者にもなれない僕達が
ぼろぼろに疲れ 流れ着いた街で たった今すれ違ったのだ
それを 出会いと呼ぶには つかの間過ぎたのだが
名前を付けてくれないか こんな傷だらけの生き方に（「ナモナキヒト」1番サビ）

名も無き僕 名も無き君 何者にもなれない僕達が
ぼろぼろに疲れ 流れ着いた街で たった今すれ違ったのだ
それを 運命と呼ぶには ありふれていたのだが
名前を付けてあげるのだ その傷だらけの生き方に（「ナモナキヒト」2番サビ）

名も無き僕 名も無き君 何者にもなれない僕達が
ぼろぼろに疲れ 流れ着いた街で たった今すれ違ったのだ
それを 必然と呼ぶには 瑣末過ぎたのだが
今こそ 名前を呼び合うのだ この傷だらけの生き方の
名も無き人（「ナモナキヒト」L サビ）

サビ前半部の「**名も無き僕 名も無き君 何者にもなれない僕達が ぼろぼろに疲れ 流れ着いた街で たった今すれ違ったのだ**」という部分は、1番・2番・ラストで共通している。後半部でも、「**それを〇〇と呼ぶには～のだが**」という形式が一貫しており、「**傷だらけの生き方**」というモチーフも共通している。共通部分が多い中で細かに変化している歌詞内容に着目し、分析を進めた。

「**何者にもなれない僕達**」が「**ぼろぼろに疲れ 流れ着いた街**」で「**すれ違った**」ことを、後半部では「**出会いと呼ぶにはつかの間過ぎた**」、「**運命と呼ぶにはありふれていた**」、「**必然と呼ぶには瑣末過ぎた**」というように、ドラマチックで壮大なものではなく、刹那的でありふれた、ささいなこととして複数の方向から捉え表現しているが、それら全てを「だが」で受けて「**名前を付けてくれないか**」「**名前を付けてあげるのだ**」「**今こそ名前を呼び合うのだ**」と続けることで、その瑣末でありふれた存在を認めてあげることを促している。

1番の「**名前を付けてくれないか**」は他者に認めてもらいたいという願いであり、2番の「**名前を付けてあげるのだ**」は自分で自分を受け入れ、認めてあげたいという意志であり、ラストの「**今こそ名前を呼び合うのだ**」は他者と自分自身の両方を認め、関わり合って生きていくという覚悟である。他者→自己→相互という段階を追って展開していくこの構造は、受動的→能動的に発展していく思考段階の推移として自然で、聴く者は楽曲を聴き進めていくうちに自己の考えが深まっていくように感じることができる。

このように段階を追って少しずつ変化していくサビの歌詞は、聴く者の思考を促すとともにそのステップを支え、スムーズに歌詞世界へと誘う役割を果たしているといえる。

「ナモナキヒト」のサビにおいて、その変化の仕方に加えてもう一つ注目したい重要な事柄がある。それは、楽曲における重要なモチーフである「**傷だらけの生き方**」に対して、その傷を癒やそうとするのではなく「**傷だらけ**」のままでその生き方に名前を付け、認めようとしているということだ。「**傷だらけ**」というマイナスイメージを伴う語句によって修飾された「**生き方**」を、その傷ごと肯定し、受け入れているのである。

このようにマイナスイメージをもつものをそのまま肯定して受け入れるような表現は、これまでに紹介してきた歌詞の中にも複数みられ、全歌詞を紹介した「もう一度」や「マスクチルドレン」にもみられるものである。以下、例として10曲から一部歌詞を引用する。なお、該当箇所において肯定されている「マイナス」には下線を引いている。

この先を救うのは 傷を負った君だからこそのフィロソフィー（略）
いつか屈辱を晴らすなら 今日、侮辱された弱さで（「フィロソフィー」）

いつか僕らが離れ離れになる その時だって笑っていたい
塞ぎ込んだ過去も正しかったと 言い張るために笑っていたい（「終わりで始まり」）

醜い君が罵られたなら 醜いままで恨みを晴らして
足りない君が馬鹿にされたなら 足りないままで幸福になって（「未来になれなかったあの夜に」）

綺麗でもなんでもねえ 小さな花が咲いた
君の無様の肯定 やむにやまれず生きて 名付けられもしないで（「花は誰かの死体に咲く」）

継ぎ接ぎだらけでみすぼらしい でも信念は大概そんなもんだ
飛べないからこそ見た景色 些細な綺麗が僕ららしい（「月が綺麗」）

今までのことなんて帳消しにしたいんだけれど 今日までの失敗なんて破り捨ててしまいたいけれど
こんな僕だからこそ あなたが好きになってくれたって言うなら もういいよ もういいよ それだけでもういいよ
胸はって 僕は僕だって 言ったっていいんでしょ いつだって ここに帰ってきたっていいって言ってよ
僕は精一杯僕を肯定するよ ただ僕を 信じてくれたあなたを 肯定する為に（「未来づくり」）

君が君を嫌いな理由を 背負った君のまま 成し遂げなくちゃ駄目だ（「ジュブナイル」）

涙流る 時も流る 僕ら確かなもんをさがしてる
街は変わる 人も変わる 昨日ゴミだった君の心も 捨てないでよ（「ナガルナガル」）

燃やすほどの情熱もないと いつか流したあの敗北の涙を
終わってたまるかと睨んだ明日に 破れかぶれに振り下ろした苛立ちの衝動を
希望と呼ばずになんと呼ぶというのか（「ワードプロセッサー」）

恒久的な欠落を 愛してこその幸福だ（「空っぽの空に潰される」）

これらの表現は、「第二章 第二節 構成分析 〇各部分に描かれている状況や心理」のグラフにみられる「マイナスプラス」に当たるものの一部でもある。楽曲末尾に近づくにつれてこの「マイナスプラス」の割合は大きくなっているが、この要素が、amazarashi の楽曲がリスナーを惹きつける非常に大きな要因であると考えられる。他人

から馬鹿にされ、笑われてもありのままの自分を肯定し、苦しみもがいた日々も無駄ではなかったと大切に抱きしめて、弱いままで、足りないままで、無様なままで未来へ進んでいけというメッセージは、劣等感や自己嫌悪に押しつぶされ息苦しさを感じている人々に、その先の在り方をひとつ提示してくれる。

これは「ありのままの自分でいい」という優しさにも思えるが、決してそれだけではない。弱くても、無様でも生きていかなければならないということは苦しいことでもあり、大きな覚悟が要ることでもある。本当の自分を誤魔化して逃げたい、もう全部諦めて楽になりたいという気持ちと戦え、向き合って苦悩し続けろ、という非常に厳しい言葉でもあるのだ。しかしその苦悩の先には光があると強く歌ってくれるから、リスナーは秋田の言葉に奮い立たされ、惹きつけられるのである。

ここまで述べてきたような、聴く者の思考を促し心を揺さぶる巧みな表現を支えているのは、直接的な心理描写だけではない。冒頭部叙述の分析内、その他の各分析内でも時折言及してきたが、amazarashi の歌詞においては状況の記述や描写による場面の演出も、聴く者の心を動かす重要な役割を担っている。そこで、野浪正隆氏の論文「場面化のための叙述（1）」を参考にして、なんらかの叙述によって場面を作り上げる「場面化」について詳しくみていくことにした。野浪氏は同論文内で、「視点のありか」「瞬時性」「可視性・可聴性・可嗅性・可触性・可味性」「心理的場面と物理的場面」の4つが場面化と関係していると述べている（野浪正隆「場面化のための叙述（1）」http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~kokugo/nonami/ronbun/bamenka.html）。これに基づき、今回は「瞬時性」と「可視性・可聴性・可嗅性・可触性・可味性」をもつ描写に着目することとした。ここでは範囲を楽曲冒頭部に限らず、楽曲全体を通しての場面化表現部分に着目し、その内容について考察を加えていきたい。以下、6曲から一部歌詞を引用する。

瞬間　突風吹き抜けて　背広の襟に張り付く花に
気付く人など少ないが　気付いた君が都市を行く（「セビロニハナ」）

打ち上げられた船乗りの靴　明星とデネボラの隙間　微かに光る六等星（「それを言葉という」）

遮断機の点滅が警報みたいだ、人生の（「フィロソフィー」）

繁華街で馴染みの顔と　音のしない笑い声　喧噪が静寂
楽しいと喜びが反比例しだして　意識の四隅に沈殿する（「幽霊」）

車両基地のレールが　喘息みたいに軋む音がして　雨が近いことをさとる
ショッピングモールの駐車場では　ベンチに腰掛けた春が　ATM が開くのを待っていた
陽射しは依然、退屈な音量で　オルゴールみたいなジャズは　この町に似合うことを自覚してるから
鳴るべくして鳴っているのだ（「水槽」）

ストーブにくべる　深雪の　一夜　縷々として　立ち昇る　煙に　百日咳
巌々山の　袂の森に　幾千年に一度の　月夜　溜め息一つの　請求書（「生活感」）

「セビロニハナ」では、タイトルにもなっている「背広に花」が張り付いている様子が、瞬間的な突風と併せて描かれている。その「**花**」に気が付く人は少ないが「**君**」は気付くという描写は、些細な出来事に心を動かす「**君**」の繊細さ、優しさを表しているといえる。敏感で繊細な心をもって、「**背広**」という正装に身を包み、時に突風の吹き抜ける「**都市を行く**」、社会に出て生きていく「**君**」に、心配しながらもエールを送るようなあたたかい思いが、その花びらで表されている。

「それを言葉という」で描かれる「**明星**」は明るく輝く金星のことで、比喩的に「その分野で、光彩を放っている人」「スター」の意味でも用いられる言葉である（新村出 編『広辞苑』第六版 岩波書店 2008年 より）。「**デネボラ**」はしし座のβ星で、うしかい座のアークトゥルスとおとめ座のスピカと共に春の大三角形を構成する2等星である。[v]その「**明星とデネボラの隙間**」で「**微かに光る六等星**」は、強い輝きによって霞んでしまう弱弱しい存在として描かれている。それは単なる天体の説明に留まらず、才能にあふれた人間と並んで霞む凡庸な自分自身のメタファーとしても捉えられ、「**打ち上げられた船乗りの靴**」という悲壮感溢れるアイテムと共に、劣等感や諦めをより強く伝える効果を果たしているといえる。

「フィロソフィー」では、「**遮断機の点滅**」といった身近にある映像が「**人生の警報みたい**」と表現されていることで、日常の中で感じる焦りや恐れがリアルに伝わるようになっている。また、遮断機が点滅している状況とはいわばその線路に身を投じるという選択ができてしまう状況でもあり、そのような行動が一瞬でも頭を過ってしまう状態、生きていくことが困難になっている状態という意味でも、「**人生の警報**」という言葉を捉えることができる。

「幽霊」では、「**繁華街**」という賑やかな舞台設定ののちに「**音のしない笑い声**」「**喧噪が静寂**」などの対比を用いた状況描写が為されている。これらはにぎやかで楽しげな外界と、それらを受け入れられなくなってしまった視点人物の心との距離を強調するものであり、「**楽しいと喜びが反比例しだして**」という心理描写や「**沈殿**」という語彙などと共に、視点人物の心の陰りを演出している。

「水槽」では、「**ベンチに腰掛けた春が ATM が開くのを待っていた**」「**オルゴールみたいなジャズはこの町に似合うことを自覚してるから**」というように、「**春**」や「**ジャズ**」という無生物が人間のように表現されている。このような「活喩法」は本研究の対象楽曲127曲のうち38曲、つまり約30%の楽曲に用いられており、ここでは季節や音楽といった目には見えないものの様子を独特な言い回しで描き出している。形容の仕方によって視点人物の存在を思わせるような効果もはたらいており、その人物の心境を風景に映し出す役目を果たしているといえる。

「生活感」では、「**ストーブ**」「**深雪の一夜**」「**縷々として立ち昇る煙**」「**百日咳**」「**巌々山の袂の森**」「**幾千年に一度の月夜**」「**溜息一つ**」「**請求書**」という複数のモチーフが淡々と列挙されている。一つひとつに価値判断は加えられていないが、それぞれの響き合いによってその場面が演出されている。雪が深く積もった寒い夜にストーブを焚いた温かい部屋、稀にみる美しい月夜などの穏やかで幻想的な舞台と、細々と立ち昇る煙を眺めながら咳をして、溜息をつきながら請求書を眺めるという現実的で悲しげな様子との対比は、現実に向かうやるせなさをよく演出している。

具体的で詳細な「可視性・可聴性・可嗅性・可触性・可味性」などをもつ情報を取り入れることで、リスナーの脳

裏にはっきりとその光景を映し出し、空気を感じ取らせ、鮮明なイメージをもたせる。そして更にその光景への評価や、活喩法などを含む比喩表現を通してそれを見ている人物の存在を意識させることで、視点人物の人物像や心理をも間接的に描き出す。時には複数のモチーフを淡々と列挙し、それぞれの対比や響き合いによってひとつの空間をつくりあげる。そういった多様な場面化表現が、楽曲への没入感を増しているのだ。

第四章 まとめと今後の課題

ここまで、語彙分析・構成分析の観点から amazarashi 秋田ひろむの書く歌詞について考えてきた。私が当初抱いていた「人生や社会における負の側面を鮮明に描き出しながら、それでもなお光に満ちた力強さをもつ歌詞」といったイメージは、今回の語彙分析や構成分析によって より確かになったように思う。

「生きる」や「夢」といった語彙のマイナスイメージを伴う文脈上での使用は、人生における苦悩や痛みをリアルに映し出し、今まさに生きづらさを感じている人々の共感を誘う。そしてそれでも自分らしさを殺さずに生きていたい、生きていてほしいという思いは、リスナーそれぞれの人生や背景に寄り添う形でそれぞれに響いていく。夢に向かって頑張ること、前向きに生きることは難しく、辛くて苦しいことだと秋田自身が身をもって知っているのだと伝わってくるからこそ、その「それでも生きてほしい」という思いはまっすぐに届いてくるのである。

また、人生における苦悩や悲しみ、自分自身の弱さや無様な部分、足りない部分を、切り捨てたり繕ったり補おうとしたりするのではなく、それらを背負ったままで、抱きしめたままで前に進んでいくのだというメッセージにも特徴がみられた。弱くてもいい、醜いままでいい、足りないままでいいというのは「あなたはそのままでいい」という優しさにも思え、はたまた「弱くても、醜くても、何かが足りなくても、生きていかなければならない」という厳しさであるとも捉えられる。心を殺して誤魔化して楽になろうとするのではなく、苦しみながら向き合い続けろと言う。それはきっと簡単なことではなく、自分という存在を守るために必要な痛みであると分かっていても、誤魔化して逃げたくなってしまうこともある。そのような人間らしい心のせめぎ合いが、両方の立場に立って強さも弱さもありのままに描き出されているからこそ、amazarashi の楽曲は嘘偽りなく心に響くのであろう。

楽曲全体の構成としては、状況・心理のマイナスからプラスへの推移や、サビ部分の歌詞表現の推移などが特徴としてみられた。そこに様々な場面化表現を織り交ぜ、感覚的な要素からも働きかけながら視点人物の心理を演出することで、歌詞世界への没入を誘ったり、楽曲を聴き終わったあとの余韻を残したりするとともに、隠喩を伴うそれぞれのモチーフに込められた意味についての興味を引き、思考の深まりを促しているといえる。心理表現のストレートさに対する場面化表現の複雑さ、多様さが、独特な歌詞世界を演出しているのだ。

期日の都合上 今回の研究で扱うことはできなかったが、amazarashi は2020年12月16日に新曲5曲（「令和二年」,「世界の解像度」,「太陽の羽化」,「馬鹿騒ぎはもう終わり」,「曇天」）を収録したミニアルバム『令和二年、雨天決行』をリリースしている。そのリリース記念として12月30日に公開されたインタビューで、秋田は amazarashi というバンド名の由来になぞらえた「今、雨は降り続いていますか？」という問いに対し、「昔よりはだいぶ良くなったと思いますが、でも一生変わらない自分の人間性みたいなものが、こびりついているみたいな実感はあります。」と答えていた。[vi]人間は変わっていくものだがその中に、変わらない、変われない部分も確かに存在する。今後は、今回用いた分析観点を適宜見直しながら、この度発表された5曲の新曲たちを含め、秋田の書くこれからの楽曲を、変わっていくところ、変わらないところの両方に着目して分析し続けていきたい。

終章 終わりに

amazarashi の音楽は、私が思い悩んだり、全部を投げ出してしまいたくなったりするたびにじっと寄り添い、傍でひたすらに「生きろ」と伝え続けてくれました。辛く苦しいのは、諦めていないから、戦っているからだと、その痛みを丸ごと肯定してくれました。そんな、私にとって大切な存在だった amazarashi の歌詞、秋田ひろむが紡ぐ言葉について、長い時間をかけて考え、論文にすることができて本当によかったです。

卒業論文の題材として扱ったものを研究途中で嫌いになってしまうといった話をよく耳にしますが、私の場合はそのようなことはなく、むしろ以前より親しみが持てるようになりました。苦しみの最中で縋るように聴いていたときの、救われているという実感をもっての「好き」とはまた違うのかもしれませんが、冷静に分析をしてみて、「やっぱりこういうところが好きだ」という理由・根拠を自分なりに明らかにできたことで、よりしみじみとした愛着が沸いたのです。先ほども述べたように、時を経て、秋田ひろむという人間も、amazarashi の音楽も変わっていき、それを聴く私という人間も変わっていきます。その中で、形は変われど、なお変わらず好きだと言えることがとても嬉しいです。

今回の研究にあたって、たくさんの先生方からご指導をいただきました。中でも、対面授業の実施が難しい中、オンラインで毎週指導してくださった野浪先生には、感謝してもし切れません。本当にありがとうございました。

状況をみながら数回開いていただけた対面授業では、ゼミのメンバーとの楽しい会話に元気をもらうこともできました。共同研究のときにも感じましたが、本当に仲間に恵まれたと思います。

国語表現ゼミナールに入って、野浪先生のもとで、あたたかい友人たちと一緒に学んでこられたことは、私にとってとても大きなことでした。この経験を糧に、今後も学び続け、成長していきたいです。

最後まで支えてくださり、本当にありがとうございました。

参考文献・使用ソフトウェア

[i] amazarashi(2/2)- 音楽ナタリー特集・インタビュー「秋田ひろむのパーソナリティ Q&A」(https://natalie.mu/music/pp/amazarashi04/page/2)

[ii] amazarashi(2011年11月号)-インタビュー | Rooftop「厭世の果てに見出された『千年幸福論』という希望」(https://rooftop.cc/interview/111101151409.php?page=2)
amazarashi(2/2)- 音楽ナタリー特集・インタビュー「秋田ひろむのパーソナリティ Q&A」(https://natalie.mu/music/pp/amazarashi04/page/2)
グルコン Vol.17 青森 ～Joker Style Summit～／開催レポート グルーヴィン楽器(2007年5月26日)(http://groovin.co.jp/gbc/aomori17.htm)
※「amazarashi-Wikipedia 注釈30(https://ja.wikipedia.org/wiki/Amazarashi#cite_note-groovin-30)」記載の情報より。元リンクは現在閲覧不可。
CDもライブでも顔出しなし――「amazarashi」って誰?(1/2)日経トレンディネット(2012年6月18日)(http://trendy.nikkeibp.co.jp/article/pickup/20120611/1041462/?ST=life&P=1)
※「amazarashi-Wikipedia 注釈31(https://ja.wikipedia.org/wiki/Amazarashi#cite_note-nikkei-31)」記載の情報より。元リンクは現在閲覧不可。

[iii] amazarashiのミニアルバム『0.』が『0.6』としていよいよ全国発売へ(2010/01/17)邦楽ニュース | 音楽情報サイトrockinon.com(https://rockinon.com/news/detail/29882)
amazarashi、遂にメジャーから物騒な「爆弾の作り方」を発表 | BARKS(https://www.barks.jp/news/?id=1000060673)

[iv]「僕に嘘をつかせた令和二年」amazarashi 秋田ひろむが語る(堀潤)-個人-Yahoo ニュース(https://news.yahoo.co.jp/byline/horijun/20201230-00215235/)

[v]こよみ用語解説 おもな恒星-国立天文台暦計算室(https://eco.mtk.nao.ac.jp/koyomi/faq/stars.html)

[vi]「僕に嘘をつかせた令和二年」amazarashi 秋田ひろむが語る(堀潤)-個人-Yahoo ニュース(https://news.yahoo.co.jp/byline/horijun/20201230-00215235/)

使用ソフトウェア
・Lyrics Master(http://www.kenichimaehashi.com/lyricsmaster/)
・KH coder(https://khcoder.net/)
・集計表作成ソフト(http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~kokugo/nonami/java/shuukei_k.html)